

半人半ゾンビは数の暴力を繰り出した！ヴィランは死ぬ！

なのはな寮長

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

いつのまにか死んでいたBOW大好きな女性がバイオのウイルスとクリーチャー操る個性を持つてヒロアカに転生し、全身全霊生きてく物語です。

目 次

第1話 明らかにゾンビはヒーロー向けじゃないよね	——	——	——	——	——	——	——	——	——	——	——
第2話 2対2? いやいや32対2だよ	——	——	——	——	——	——	——	——	——	——	——
第3話 根に持つタイプにケンカを売るな	——	——	——	——	——	——	——	——	——	——	——
第4話 何とかして新型ウイルスを作り出そう!	——	——	——	——	——	——	——	——	——	——	——
第5話 特訓に喰われる休日	——	——	——	——	——	——	——	——	——	——	——
第6話 体育祭ナウ! 荒らすぜー! 止めてみな!	——	——	——	——	——	——	——	——	——	——	——
第7話 私つてば障害物競走に向いてないと心底思う	——	——	——	——	——	——	——	——	——	——	——
	102	93	77	68	58	42	1				

第1話 明らかにゾンビはヒーロー向けじゃないよね

ある女性が1人、立ち尽くし絶句していた。

まあ無理もない。彼女の目の前に広がるのは見たことも来たことも聞いたことも。来ようと思ったことさえない、だだつ広い花畠。彼女はそう、確かに少し前の時間。こんな自然豊かな場所ではなく、灰色と黒でいっぱいのコンクリートジャングルにいた。花など申し訳程度のものしか見かけなかつたし、新鮮な土など久しく踏んでいない。

女性は何が起こつたのか、そして起きているのか、全くわからなかつた。

「……つあー……待つて待つて待つて……ん”ん”、なにこれ?なんで私こんなトコいんの……?」

誰が見ているわけでもないのに女性は左手を顔に当て、右手を前に突き出しオーバーリアクションで待つたをかける。どうやら言葉は出せるようになつても、混乱状態は続いているようだつた。

「私さつきまでほら……えーと……あれ何してたつけ……?……つそうだ!確か……」

本当に少し前の時間、アスファルトの地面を踏んでいたあの時間。そこから現在に至るまでの過程を女性は振り返つてみる事にした。過程がスッ飛び、結果だけが残るなどありえない。そう思い続けながら目を瞑り、思考を深めていく。

「(あれは……そう。買い物をした帰りだ……結構行く店だつたから、帰り道もいつもの固定された道だつた……)」

女性の頭の中には、買い物袋を持つて歩き慣れた道を歩く自分が思い浮かんでいる。こんなにすつと想い付くのは、相当そこを歩いているからなのだろう。

「(ああ……あそこは数日前おじさま方が工事していたところ……もう特に問題が無さそうだからそこを歩いたんだ……)」

想像上の女性は躊躇わざに舗装工事されていた場所を歩き、マンホールの蓋に足をかけた。その瞬間。

「（……つ！！…そだ……!!思い出したぞ……!!）……私はマンホールから落ちたんだ……!!あの時足をかけたマンホール、蓋はあつたけど無かつたんだ……!!すり抜けた……！だから落ちた……!!しかもなぜか、真つ逆さまに」

彼女の言つてることは狂言に聞こえそうなものだが、確かにそうだ。彼女が踏んだマンホールの蓋はすり抜けた。まるで幻覚だつたかのように。

それに真つ逆さまというのもおかしい。成人した女性が足から落ちれば、下まで落ちる間にひっくり返る可能性はほぼない。

というかそもそも、足を揃えて両足でぴょんとでもしない限り、全身がその狭さの穴に落ちるわけがないのだ。片足で踏み込んだのならもう片方はほぼ引つかかるはずだ。

だが彼女は落ちた。あつたはずのマンホールを片足で踏んで真つ逆さまに頭から。

「……つて事は……頭から落ちたつて事は……。私つてば——」

「ああ、死んでいるぞ」

突然、背後から自分の言おうとしていた質問に先回りして答える声がした。

慌てて後ろを振り返り、声の主を確認しようとする。……が。

「……あれ？ つかしーな……声が聞こえたと思つたんだが……」

女性の視界にはおおよそ声を出せるような何かは見受けられなかつた。正面はもちろん、右を見ても左を見ても、それらしき何かは一向に見つからない。……と、その時。

「……こつちだ馬鹿者!!」

「うおわっ！……つて……ん？」

「貴様つ……！我を見て見ぬ振りをしようとは……!!中々度胸があるやつだ……!!」

女性の視界の下から自己主張するように大きな声が聞こえ、驚きながらそちらを見る。

そこにいたのは、小学校低～中学年くらいの身長の少年だった。髪の色は珍しくもない黒一色だが、顔立ちは大変整っていて、声もまあ身長にあつている幼くて可愛らしい声だ。

ただ、その目は女性をひたすらに睨んでいるし、口調もなんだか高慢な感じがするが。

「……君もここで迷子なのかい？」

「くくく!! 子供扱いするなあ!!」

女性がそんな言葉を少年にかけると、怒つて顔を真っ赤にしながら抗議してくる。

この少年は子供として見られるのが嫌いらしい。だがどう見ても言い訳のしようのないくらいの子供である。

「うくつ……!! 犯めた態度を取つてくれるな……!! 我はそう……貴様らで言う神だぞ！ もう少し何かあるんじやあ無いのか!?」

「何か……？……はい、のど飴」

「いらぬわ!! 我が言つておるのは、その態度のことだつ！ これでは話が一向に進まぬぞ！」

女性がポケットから取り出したのど飴を手で弾き、更にきやんきやんと子犬のように吠え続ける神を自称する少年。

女性はそれならとチョコレートを手に持つていたバッグから取り出そうとして……ふと、少年の言つたある単語が耳に止まつた。

「話……？ 話つて……この私の状況の事とか……？」

「そうだ！ いいからほらつ!! そこに直れつ!! 一から説明してやる！ だが私は立つたまま話すぞ！ 我は上！ 貴様は下だ!!」

どうやら見下されるのすら腹が立つといった様子だ。女性は頭に？を浮かべながらも、説明してもらえるのは大助かりなので、少年に言われた通りに正座して座る。

「こほん……まず前提を話してやろう。さつきも言つたが、貴様は死んでいる。穴に頭から落ちてな」

薄々本人も気付いていたが、こうもあつさり告げられた。女性は少々へこんだが、ここで『前提』という言葉を思い出す。前提と言う事は、まだ何があるのだろう。

夢だつたら万々歳だし、夢じやなかつたら純粹にブチ切れればいいと彼女は思い、冷静に話を聞き続ける。

「……じゃあ、私が死んでいて、君……いや、あなたが神だと言うなら、ここはあれですか？死後の世界とか言うやつですか？」

「貴様たちの言葉で言うならそうだ。ただし、ここはちょっと違うがな」

「……違う？違うって……何がです？」

少年の何か引つかかる言い方に、急いで問い合わせる。今この状況は何もかもが謎だらけだ。しれる事は少しでも多く知りたいと迫るのは不思議ではない。

「……全ての生物にはな、運命というものが決められており、決められたものは誰もがその運命に従つて行動する。貴様らが選択しているつもりでも、実際は全て運命通りという事だ」

「……は、はい？いきなり何を……」

脈絡のない話題の振り方に女性が困惑していると、少年は急に顔を青くしながら言葉を紡ぐ。

「……つ、つまり……だ。その……我が仕事で張り切りすぎて、死ぬのがまだ先だった貴様を間違えて死後の世界こつち側に連れてきてしまつたのも……その……な、長い目で見れば運命通り……というわけ、なんだが——むぐうつ！」

「あく……ごめん……。聞き間違いかな？今君の口から間違えて殺しちゃつた☆みたいな言葉が聞こえた気がするんだが……？」

少年の両頬をつねりながらふつふつと怒りの感情を露わにする女性。感情が高ぶるあまり、身体が震えてすらいる。

少年が女性の質問を肯定するようにつねられながら頷くと、その怒りは一瞬で我慢の限界を迎えた。

「……流石にこれは運命だなんだじやあ納得いかねえなあオイ!!なあ!!どう繫がつ、償つてくれるんだよなあ!!とりあえず私を元の場所に返せやつ!!」

少年の頬を上下左右に引つ張りながら、不平不満を男のような口調でぶつけ続ける女性。対する少年はと言うと、涙目になりながら腕を

振つて頬をつねられる痛みに悶えていた。

「ひや、ひやめろひんげん！ふあれをられらとふおふおろえる!!ふあれはひらいなるふあみらう!!ひや、ひやめろふおいつへ——い、いふあいふあい!!もうひやめへえええつ!!」

その後も女性は降伏した少年の頬を4～5分つねり続け、ある程度スッキリすると手を離した。

「ううう……まだひりひりするよう……」

「何がよう、だ。キャラ全然違うじやねえかお前」

「あ、あれはその……僕はこんな見た目だからせめて態度は大きくて舐められないようにと……」

「んなことのために私こんなに怒つてんじやねえんだよ。お前とりあえず……この状況の詳しい説明しろよ……！」

涙目でへたりと座り込み、すっかりしおらしくなった少年は赤くなつた自分の頬を撫でている。対する女性はとくに、ヤンキー座りをしながら彼の真ん前で睨みを効かせていた。性別を変えたら職質待つた無しの絵面である。性別を変えずとも危ないことにはないが。

「ひいいつ……!!わ、わかりましたあつ……!!だから怒らないで下さいつ……」

「おーし良い子だ。じゃあ言えつ、早くつ、ほれつ、言えつ」

「あうう……急かさないで下さいい……」

一転して、なよなよした雰囲気を纏う少年にさつさとしろと急かす女性。花畠という大変ファンシーでメルヘンな場所ではあるが、この状況はそれでは誤魔化しきれなかつた。

「えつと……さ、さつきも言つた通り、僕が貴女のことミスで殺してしまつたんですが……ご質問などは……」

「……もう質問に移るのかよ」

「い、今話したことが一応全てなので……」

極シンプルな説明だけしてすぐに質問に移る少年に思わず突つ込みを入れる女性。

それに対し、少年は申し訳なさげにそう言つた。

「……まあいいや……。じゃあ聞くが、私は元に戻れるのか？」

「いえ……つ。それは……ちょっとと……」

「なんで?」

その質問に対し明らかに出来ない風な態度を取る少年に、女性はかなりの殺意を込めて再び質問をする。どうやら色々なことがかなり頭に来ているようだつた。

「……僕も良く知りません……上が決めた事ですから……」

「じゃあ私をお偉いさんの所に連れてけよ。直談判するわ」

「もちろん無理ですよ……」

「……ですよねー……。……はあ、じゃあ私はこれからどーすりやいの? よくある閻魔様に会つて天国か地獄に連れてかれんの?」

ダメ元で言つた策をあつさりと断られ、頬杖をつきながらため息混じりにこれから自分の事を聞く女性。

それを聞いた少年は、やつとか、と言つた表情を浮かべながら、再び語り始める。

「……いや、貴女の場合は違います」

「……? 私の……場合……? どういう事……?」

「かなり最初の話になるんですけど、貴女の、ここは死後の世界ですか? という問いに、僕はここはちょっと違うと答えましたよね?」

「ん? あー……うん……そうだね……」

少年のその質問に、目を泳がせながら歯切れ悪く答える女性。ここまであからさまに忘れている感を出されると、一周回つて怪しく見えない。

「……忘れてましたね……まあいいです。あの時僕はとりあえず今の貴女の状況を教えることが先決だと思い、そちらを優先しました。……という事で今度は、この場所の正体について教えます」

「なんか話が急展開だな。長くなりそうなら三行でまとめて」「ここは一応死後の世界ですが、

転生する運命を持つ人を、

「……また運命か」

「また運命です。今のは普通に説明していたらもつと聞けましたよ」

見事に三行でまとめた少年に対し、食べ飽きた物が食卓に出された時のような表情で呟く女性。

少年も我慢してくれという顔で話を続ける。

「じゃーもう……さつさと転生させてくれ。もうこれ以上その言葉は聞きたくない」

「……分かりました。しかし対応力が高すぎて逆に不気味ですね……」

「下界では転生って言葉もわりと食傷氣味なくらい聞くからさ、予習はバツチリなの」

「ええ……ま、まあいいです。でもその前にいくつかやることがあります。まず、転生する先の世界を見て、説明しなければなりません」「いーよそんなの説明しなくて。ノーサンキュー」

「ダメです。その世界の状況は知つておかないとダメなので説明します」

「いいです」

「ダメです」

「いいです」

「ダメです」

「いい」

「ダメ」

「……教えて」

女性は結局押し切られ、しぶしぶと少年に説明を求めた。

「はい、では説明させて頂きます。貴女が行く世界は……まあかなりざつくり言えば、『個性』という不思議な力を備えた人が沢山いる世界です」

「……個性……？」

早速気になるワードを耳にして、それに疑問を持つ女性。少年はそれに対し、まさかと言う顔で聞き返した。

「……ご存知で？」

「いやさ……私は読んだことないんだけど、知り合いが私に読ませた

くて最低限の基礎を必死に説明してきた漫画があつてね……そん時聞いた説明が、ドンピシャでその世界の世界観と一致してんのよ。あくまで偶然だろうけど……」

「……その漫画のタイトルは？」

「え……？た、確か……『僕のヒーローアカデミア』……だつた気がするけど……そんなこと聞いてどうすんの？」

少年の質問に一瞬戸惑い、うろ覚えの頭からなんとかタイトルを引っ張り出した女性。それを聞いた少年は目を瞑り、額に手を当てて何かを考えるようなポーズを取る。それを30秒ほど続けると目を開けて、女性にこう伝えた。

「……はい、ドンピシャビングゴです。貴女の言つた『僕のヒーローアカデミア』と、貴女が転生する世界は、寸分の狂いもなく合致します」「うわあ……マジで……？」

自分が過ごす第二の人生の舞台が漫画の世界、と心の中で驚愕する女性。別の世界をオーダーしようとも考えたが、おそらくこちらに世界を決める権利は無いのだろう。どうせ運命で片付けられる、と察して提案するのをやめた。

「……そういうばさつき言つてましたよね。最低限の基礎を教えてもらつたと……」

「んまあ……そうだね……」

「それならこここの説明飛ばしていいですね」

「飛ばすの!?」

まさかの言葉に声を大にして突っ込みを入れる女性。

「いやだつて……知つてるなら言う必要ですし、貴女も時間短縮できていいい事ずくめだと思いますが……」

「……そもそもそうだつたわ……つてか待つて。僕のヒーローアカデミアの世界つて確か……バリバリのバトル系だつたよね……なんか……雄英?とかいう学校の生徒が主人公でしょ?キャラ自体は知らないけど……」

「ええ、一般人を除いて結構どんぱちやる人が多いようです」

「……私どーすんのよ?個性的な自覚はあるけど個性なんてもつてな

いぜ？もしかしてデビルの実とか幽波紋とかくれんの？」

人差し指を立てて説明する少年に、不安そうな顔でそう質問する。だが、ジョークを交えるあたり余裕もありそうだった。

「貴女がお望みとあらばそれでもいいでしょう。貴女が望む何かを授けられて送り出されるのも運命」

「まあ、便利な言葉ですこと……しかし何か……ねえ……戦いに使えるもんがいいよね多分……」

なんだか上品な雰囲気で皮肉を呟きながらも、顎に手を当ててその望む何かとやらについて考え始める。

「ええ、貴女の転生先での運命は、一般人の送る植物のような平穩な生活ではありませんので」

「やつぱりかよ、ふざけんなこの野郎運命」

「それは僕に言われても……」
少年のお告げを聞いて静かにガチギレする女性に対し、困った顔で応対する少年。

そんなふざけたやりとりを終えると、女性が閃いたように言つた。

「……あっ、そうだ。じゃあさ。こういうのってアリ？」

「……？どういうのです？」

「ば、バイオハザードのウイルスを操つて、感染させたものを使役できる……みたいな……」

「……」

望む能力を要求しているうちに、なんだか中学二年生レベルの妄想を垂れ流している気分になり、少しづつ顔が赤くなしていく女性。

その心境は、穴があつたら入りたいなんてものではないだろう。次第に両者無言になつていき、女性のメンタルがそろそろ碎け散りそうになつたところで少年が助け舟を出した。

「……出来ますよ」

「マジで！？」

それを聞いた女性の顔がとても嬉しそうになると同時に、心の耐久値もギリギリのところで回復した。

「ええ、でもさつき言つてたような物じやなくていいんです？もつとこう……どんでもないもの要求するものだと思つてましたが……」

「いーのいーのっ！」

なぜ女性がここまでうきうきとしているのかというと……多趣味な彼女の漫画アニメゲームその他諸々の『娯楽』に分類される知識の中では、もちろん好きなもの嫌いなもの多々ある。が、その中で取分け好きな物が『バイオハザード』である。

別にゲームについて特別詳しかつたりとか、プレイが凄く上手かつたりとか、敵が話すスペイン語の空耳を集めた動画を小一時間見続けたりとかをするほどのガチ勢ではなく、ただ単に彼女はバイオハザードが好きなエンジョイ勢なのだ。

それに彼女は操作するキヤラクターより、敵であるクリーチャーの方がよっぽど魅力的に映るらしい。

好きを優先してこれから的人生でトップクラスに大事になるものを決めてもいいのか不思議でならないが、まあ彼女がいいならいいのだろう。

「……ですが、さつきの願いはかなり大雑把過ぎます。もう少し細かいところまで具体的に言つてもらえた助かるんですけど……」

「……言わなきやダメ？」

「ダメ」

「どうしても？」

「どうしてもです。まあ、不明瞭な情報で作った能力でトラブルが起こつても、僕は責任取れませんから」

「……説明させて頂きますう……」

さつきみたいな説明でもメンタルが爆音で危険信号を発していたのに、再びあの中二妄想をより詳しく細かくぶちまけたら確実に心が弾ける自信があつたので、女性は説明を全力で拒否しようとしたが、流石に自分の命が関わってきたら話は別なのだろう。不本意を固めて作つたような表情で、しぶしぶと自分の欲しい能力について説明を始めた。

そして十分ほど経ち、女性がある程度の説明を終えると今度は少年

が最終確認としてオーダーをとったファミレスの店員のように欲しい能力について繰り返した。

「ふう……これでいいです？」

「……つはいつ……ぐすつ……！ いいですぅ……」

「泣かないでくださいよ……僕だつてこんな長いこと喋るのしんどかつたんですから……それに、細かく設定してくれたおかげで僕もイメージを掴めました。だから貴女の恥ずかしい思いは無駄じやないですよ」

自分の妄想を他人の口からリピートされ、羞恥心のあまり顔を真っ赤にして泣き始める女性。なんだかいたたまれなくなつた少年は背中をぽんぽんと叩きながら慰めの言葉をかける。

「えぐつ……うぐつ……」

「ほら、いつまで泣いているんです。もう能力も作りましたし、後決めることは任意ですし、それ終わつたら転生ですから。もうひと頑張りして下さいよ」

「……その任意の事つて……？」

あと少しと聞くと、女性は「しげ」と手で涙を拭つてその任意の事とやらの詳細を少年に問う。黒歴史となるであろう情報を知られた者から出来るだけ早く離れたいのかもしれない。

「ええ、せつかく転生……新しい人生を始めるんです。見た目や名前……変えたかつたりしませんか？」

「……そうねえ……まあ、ここまで来たら妄想ぶちまけちゃいますか。見た目はそうだな……赤髪赤目で。出来れば上の中くらいの容姿にして欲しいかな……。名前は……うーん……骸牙……骸牙菌華でお願い出来る……？」

「ええ、お安い御用ですよ。そのように手配します」

その要望に少年はこくりと頷き、さらつと了承した。その程度は神からしたらお茶の子さいさいなのだろう。

「あ、ああ……ありがと……」

「……まだ何か不明な点など？」

が、しかし、自分の要望にお安い御用と自信に満ち溢れた答えを返

されてなお、女性は不安そうな顔をしている。

それがあまりにもわかりやすく態度に出ているものだから、見兼ねた少年はつい女性にどうかしたかと質問をした。

「いやさ……私つてこれからいわゆる特殊能力を持つて、僕のヒーローアカデミアの世界に転生するわけでしょ……？」

「ええ、その通りです」

「……私それの使い方とかもちろん知らないんだけど……いざ使う時どうすればいいの……？使い方はご存知のはず、とか言われても分かるほどの理解力は私には備わってないんだけど……」「そこをなんとかアドリブで頑張れません？」

「もしかして実は死神だつたりする？」

この先のことを考えるとかなり重要な悩みを女性は打ち明けるが、それに対して少年は物凄く軽く端的に死刑宣告にも等しい言葉を女性に投げかけた。

少年から結構どんぱちやる世界と聞いていた彼女からしたら、ちょっと遠回しに死ねと言われているようなものである。よく言われる言葉だが、やはりどんなものもいくら凄いものだろうが使えなければ意味がないのだ。

「違いますよ。もちろん冗談です」

「本当にか……？」

「……本當です。で、ちゃんとした質問の答えがあるんですけど……」

「おい待てい。お前今答えが出るのになかなか時間がかかるだろ」

「いやかかってませんけど」

「嘘こけぜつてーかかってたぞ」

事実、少年は本當です、と答えるのに5秒ほど何も言わなかつたのだが、彼はそれを頑なに認めようとせず、別の話題に逃げようとする。神のくせにやる事がなんとも小賢しいものだ。

しかし女性も命に関わる事なので、流石に食い下がつて少年を問い合わせていく。だが少年はすつとぼけ続け、目を明後日の方向にそらしていた。

「まあそんなことは置いといてですね」

「置くな、今消化しろ」

「それで能力の使い方についてなんんですけど」

「スルー? ここにきてまさかのスルー? お前この野郎……」

「転生した直後から、最低限の能力の使い方を知識として貴女の頭の中に入れておきますね」

「いいじゃん。気に入つたわ」

もはやこちらの意見や言い分を全く聞こうとせず、1人で喋り続ける少年に女性がそろそろその頭に拳骨を落としてやろうかと考えていると、自分がついさつき彼にした、能力を使うためにどうすればいいか、という質問の答えがとても良い物だったのでもう怒りを忘れてそちらに食いついた。

というか、彼女は自身の安全を守るためにそう彼に質問したのであつて、最終的に自分が無事に生きしていく何かしらの術を持てるのなら、少年が答えるのに時間がかかるかかつてないなんて下らない過程はさして問題ではないのだろう。

「それは何よりです」

「……でもこれ……すげーご都合主義だよね……人の知識に入るとかどうなつてんの……?」

「……詳しくは言えません。ただ言えることは、能力や容姿、名前などと一緒に、出来るサポートはやれるだけありますよ」

「……ま、こつちは助かるからいつか」

自分では到底わからない事象についてこれ以上深く考えるのが面倒になつた女性は、早々に自己完結してこの事について思考するのをやめた。

そして少年はその様子を見て、ようやく転生に必要な全ての行程を終わらせたと思い、最後の仕上げに取り掛かる。

「……さて、ようやく転生の時間です。最後に何か聞きたいことはありますか?」

「はいはいはいはい 一つあります」

「何でしょう?」

「……お前さ、言葉遣いとか口コロコロ変わつたけど、多重人格か何か

なの？」

「えつ……？あ、あゝ……あれはですね……」

少年は転生についての疑問が何かを聞くかと思つていたが、まさか自分の態度の事だとは予想もしていなかつたので一瞬戸惑つたが、特に隠すような事でもないのですぐにその質問に答え始めた。

「これは言いましたけど、最初の僕は舐められないように虚勢を張つてたんです。こんな見た目ですし、態度くらいは大きく……と」「その結果あんな一部の性癖に刺さりそうなもんが出来上がつたつてのか」

「言い方が良くないです……で、あのなよなよした僕は、単純に頬をつねられたり怒鳴られたりで縮こまつちやつたんです」

「いやむしろそれで済んだだけありがたく思えよ。殺されたんだよこつちは」

「それに関してはすみません。……で、今の僕が素です。こんな感じでいいですか？」

「なーるほど……ま、大体わかつたわ。じゃあもう聞くことねーよ」

少年の性格の変わつた理由を聞いて頭の中の疑問が無くなつた女性は、スッキリとした顔ではよ転生させてくれと言わんばかりの態度を取る。

「それは何よりです。……では、始めましょうか……」

少年もその態度を見て早々にこの話題を切り上げ、真剣な表情で両手を女性の方に向ける。すると、女性の足元が緑豊かな地面から、青と紫と黒をいたずらにかき混ぜてぶちまけたようなおぞましい色の何かに変わつっていく。

彼女の足がゆっくりとそのサイケデリックな何かに沈み始めているあたり、材質は泥や沼のそれだろう。

「……ねえこの……何？これ何？このいかにも口にしたら頭弾け飛んで死にますみたいな色してるドロドロ何？」

「ああ、それは転生するためのゲートみたいなものです。全身が沈んだら転生完了です」

「いや……どうせならもつと神秘的な感じに送り出してよ……めつ

ちやべタベタして気持ち悪いんだけど……」

女性が興味本位でゲートを掬うと、手に収まりきらない分がこぼれ落ち、粘着質な音を立てて沼に着地する。そして同時に、女性はこのゲートに触れた事を心底不快そうな顔をして後悔した。

温度は冷たくもなければ暖かくもない、一番気持ち悪い温度。重さはそれなり。質感は噛み終わつたガムと泥を足して2で割つた感じ。新しい人生の始まりとしては最悪である。

「あ、そういうえば言い忘れた事いくつかあつたんで伝えておきますね」「それこのタイミングで言う？」

「すいません。で、その言い忘れた事というのがですね……」

腰辺りまで沈んだ女性に今更言い忘れた事を伝えようとすると少年。女性が突っ込むも、少年は軽く流して本題へと入つた。

「まず、貴女の能力についてなんですが、多分真っ当な人間をやつてたら動物ならともかく人の死体なんて手に入らないでしよう？サービスで30人分。転生した直後から出せるようになります」

「え……あ……ありがとう……」

少年から告げられた内容が予想していたことよりも悪くなく、それどころか良いことですらあつたので少し拍子抜けしてしまう女性。しかし、人生楽あれば苦もあるもので、それで終わりとはいかなかった。

「次に、貴女は転生した瞬間から高校一年生です。設定としては小さな頃に両親が亡くなり、親戚の人に引き取つてもらつてその歳まで育ち、親戚が海外に移住するタイミングで高校生になつて、親の残した遺産で一人暮らしを始めた16歳……です。ちなみに高校の名前はさつき貴女も言つていた『雄英高校』。貴女はどうしても行きたかつたその学校に見事受かり、入学した……という設定……もとい運命です」

もう既に肩まで浸かっている女性に、もはや言う側も聞く側も飽きたであろう言葉「運命」口に出す少年。

というかさらりと言つたが、16年を一気に短縮され、さらに行く高校まで決められているというのはどうなのだろうか。

「…………え？ いや…………え？ ちょっと待つてマジで言つてるそれ？」

「マジです。ちなみに入学には成功したけども、初登校の日に運悪く体調を崩し、後日改めて行く……という運命でもあります」

「いや嘘だろお前!? この状況で言わねーだろ普通!! 今私首まで浸かってんだよ!! 早よ言えやそれ!! 死体の話ならともかくさ!! そうなるんなら色々あるんだよこつちにも!! 心の準備とかよ!!」

案の定、女性は最初に死んだと告げられた時のように声を大にして怒り始めた。まあ自分の前世と来世をここまで引っ搔き回されたとなれば、怒るのも当然であるが。

「…………実はその…………もう一つあるんですけど…………言い忘れた事…………」「…………何?」

怒鳴り散らしている女性を前に、おずおずと拳手しながらまだあつた伝え忘れた事を言おうとする少年。女性はあからさまに不機嫌になりながら、その忘れた事について問う。

「えー…………つとお…………その…………て、転生した日が、貴女が学校に登校する初めての日なので…………ち、遅刻しないように——」

「間ア置けや!! なんで転生直後に登校しなきやいけねえんだよ!! せめて1日か2日前に出せよ!! マジお前ちよつ…………今度会つたら——がぼつ！ ごぼぼぼつ！！…………ゞぶつ…………！」

少年がすっかり縮こまりモードで話した内容にさらに怒りの炎を燃やして叫ぶ女性だが、タイミング悪く話している途中で全身が沼に沈み、意識がどんどん薄れていく。

「…………今度会つたら…………何だろう…………」

女性が全身沈んだことを確認して、再び手を前に出してゲートを閉じる少年。そして青空を仰ぎ見ながら、女性の捨て台詞にも似た言葉を反芻した。

「…………僕のせいじやあ…………ないんだけどなあ…………」

少年は、今度会った時は何かされる前に説明し直さなければと心に誓つた。

「…………クソッ…………せつて…………許さん…………。…………つて、どおおおあつ!!? 何ここつ…………!?え……!?どこ…………。…………いや待て…………そういえば私の部屋なわけがねえや…………ま、しかし、いきなり知らない部屋つてのはびっくりするもんだな…………」

何やら寝言を呟きながらゆっくりとまぶたを開くと、そこにあつたのはいつもの見慣れた部屋ではなく、全く見覚えのない部屋。

汚れてはいないが特別綺麗というわけでもない。勉強道具がびつしりと並んでいるわけじやないが、アニメのグッズなどがたくさんあるわけでもない。普通の女子高生らしい部屋だ。

女性…………もとい菌華が驚きながら凄い勢いで起き上がり、改めて自分の今の状況を把握する。

彼女が寝ていたのはセミダブルほどのベッドで、ご丁寧に近くにある棚の上に目覚まし時計が置いてある。菌華はベッドに座り込みながら、さらなる新しい発見を求めてもつと部屋を見渡してみた。

「はえく…………生活に必要そうなものは一通り揃ってるなあ…………ってこんなことしてる場合じやねえ!! 部屋の物色は帰つてからだ! なんたつて今日は登校日だからなちくしよう!! いつまでに登校すりやいいか分かんねえから急ぐしかねえ!! エーと…………制服どこだ制服どこだ…………! 探すぞ! ……!! つと、あつたあ!! 多分これだよな! 多分!!」 そういえばと自分のやるべきことを思い出し、ベッドから秒で降りると全力で制服を探し始める菌華。あらゆる所を探し尽くし、クローゼットの中にハンガーにかけてあつた制服らしき上下の衣類を引っ掻む。そして今来ているパジャマらしき衣服を全て脱ぎ捨て、クローゼットから引っ張り出したそれらを着る。

「…………うし…………!! 制服は完璧…………次はカバン…………!! エー…………これだな!? うん!! 中身もそれっぽいし!! ならこれで準備OK!! 洗顔は妥協!!

歯磨きは夜倍やる!!朝飯は外の空氣!!つし、行くぜ!!

一周回つてなんかもう逆に楽しくなつてきた菌華はハイテンションでカバンを持ち、自室を出てからまた周りを見回して、玄関を見つけるとそこに真っ先に向かつていつた。

「オラもう私は止まらんぜ!!おはようござります!!」

「えつ……!?あ……おはよう……ございます……」

「は……?…………!!」

菌華が新しい世界に向けて精一杯のおはようを告げたと思つたら、たまたまドアの前を歩いていた人と鉢合わせになり、その人に向けて言つたようになつてしまつた。

おそらく初対面であろう、緑色のくせ毛とそばかすが特徴的な大人しめの男性は、かなり驚いた様子をしながらも突然の挨拶に律儀に返事を返した。

だが一方で菌華は、あれだけ止まらないなどと豪語しておきながら、顔を真つ赤にして完全に停止している。

男性の方もこれ以上何をどうすればいいのか分からず、止まつており、ただただ嫌な静寂が流れていく。

「……つてあれ？その制服……もしかして君も雄英の生徒……？」

「……え？君も……つて事はあなたも……？」

「うん、僕も……ほほほほ運が良かつたから受かつたようなもんだけど……」

しかし、男性の方がこの静けさを打ち碎いた。

菌華の着ている衣類を指差して、そんなことを聞いてくる。菌華が逆に質問を返すと、男性はあははは……と苦笑いしながらそう答えた。

「私も……まあそんな感じかなー……。……私は……骸牙菌華。死体の骸に、牙で骸牙。ウイルスの菌に華やかの華で菌華」

そんな事を呟きながら、ここであつたのも何かの縁と自己紹介を始める菌華。一瞬なんて名乗ればいいのか迷つたが、この世界での自分の名前を思い出し、指で漢字を空書きして男性に見せた。

「へへ、いい名前だね。あつ、僕は緑谷出久。緑に谷で緑谷。出るに久

しいの久で出久。緑谷つて呼んでくれたらいいかな……えーっと
……」

「菌華でいいよ、緑谷くん。今日からよろしく」

同じく空書きで名前を教える緑谷。しかし、自分の呼び方は言つた
とはい、菌華のことはどうやつて呼べばいいかと迷つていると、菌
華が手を差し出しながらフオロローを入れた。

「あつ……こつ、こちらこそよろしくつ……菌華さん……」

緑谷はがちがちになりながらもその手を握り、恐る恐る菌華の名前
を呼んだ。

女子を下の名前で呼んだことなど久しくないので慣れていないよ
うだつた。

「いや、さんは柄じやないよ」

「えつ……じゃ、じゃあ……菌華ちゃん？」

「うん。それがいいな。ハイ、ヨロシクウ！」

すつかりテンションが元どおりになつた菌華は、ちゃん付けが気に
入つたのか握つた手をぶんぶんと上下に振りながら再びよろしくと
緑谷に伝える。

「えつと……自己紹介も終わつたし……向かおつか？」

「あつ！そ、そつか！時間つて大丈夫……!?」

「ん？全然大丈夫だよ！余裕持つていけるよ！」

「な、ならよかつた……安心して行ける……！」

緑谷の発言を聞いて菌華もそういえばと焦つて質問するが、遅刻し
ないという情報を聞き、ほつと胸を撫で下ろした。

そして緑谷の手を離すと、右手を真っ直ぐに伸ばして額に当ててま
るで敬礼のような仕草をとつて一言。

「では、道案内よろしく頼ります！」

「え……!?う、うん……いいけど……入試行つたんだつたら場所知つ
てるんじゃないの？しかも初登校日今日じやないし……」

「え……あ、あく……それがさ……入試は行つたんだけど……実は
登校すんの今日が初めてでさ……。入試受けた次の日くらいに思
いつきり体調崩……いや、頭を机に強打してちよつと飛んじやつたん

だよね、記憶……だから覚えてなくて……」

何気なく言つた発言から生じた矛盾を指摘され、慌てて少年に言われた設定を多少のアドリブ混ぜつつ説明する菌華。順応力は高い割に、転生したという自覚があまり無いようだった。

「（……どうだこれ……？ 行けるか……？ いや私なら金積まれても信じないようなこのクソザコシナリオじやあ流石に無理か……？）」

菌華自身も言つておいて本当に信じてもらえるのか心配になり、少し冷や汗をかきながら緑谷の返答を待つ。確かに「忘れた」や「記憶にない」は状況によつては秒で嘘だと断定されるくらい信用性に欠ける言葉だ。

それにこんな不信の念に拍車をかけるような怪しさ満点のシナリオでは、菌華の不安も仕方ないと言える。

「……なるほど……！ そんな事情があつたから登校日にも来れなかつたんだね……！ そういうことなら任せて！ 案内するよ！」

「（……うしつ、乗り切つたぜっ！ まさかこれで信じてもらえるたあ思つてなかつたけど……まあいい！ 終わり良ければ全てベネ！ 全くちつともノー問題！！……とか自己暗示しないと危うく緑谷くんに「もしかして壺とか買つちゃうタイプ？」って言つちやいそうだ……）あ、ありがとー！ いやー助かるわマジで！」

一縷の望みにすらかけていなかつたのに、すんなりと受け入れられて戸惑う菌華。

とんでもなく失礼な本音を建前で隠しながらも一応お礼は言つた。

「いいよお礼なんて……！ ほら、行こう！」

「う、うん……！」

「……あ、着いた。ここが雄英高校だよ」

「……いや……デカくない……？ マジに学校なの？ここ……？」

緑谷と駄弁りつつ通学路の説明をしてもらひながら、特に何のトラブルもなく無事、雄英の校門に到着した菌華。目の前にそびえ立つ余りにも巨大な学び舎に圧倒され、少しボキヤブラーが貧困になつてゐる様だつた。

「うん。中もかなり広くてね、初めはクラスを探すのとか大変だつたよ……」

「そりやあだろうね……つて、そうだ！ クラス!! 私自分のクラス知らな……じゃねえ忘れたんだけど!!」

「えつ……!? そ、それは流石に……案内しきれないかな……」

緑谷の話を聞いていて思い出した……というか正確には思い付いたと言うべきか。ともかく、菌華が自分のクラスを知らないと慌てて騒ぎ始めた。

それを聞いて、そこまでは無理だと申し訳なさそうに断つておく緑谷。元々はある少年の説明不足と菌華の確認不足が招いた事で、彼が申し訳なくなる必要はどこにも無いのだが。

「大丈夫私もそこまで『厄介になろうとか思つてないから!! むしろここまでありがと!! ジャ！ 私はこのクソほど広そうな校舎を駆けずり回つて関係者の方に聞いたりしてクラス探すから!!」

「いやいや！ 全然大丈夫じゃないよ！ やめといた方がいいよそれ!! 逆に遅刻しちゃうよ!!」

超早口でお礼とこれから予定を言い、見切り発車で走り去ろうとする菌華を全力で引き止める緑谷。早速『厄介になつて』いる。

そんな実に合理性の欠くやり取りを見て、口を出す者が1人いた。「登校日に来れなかつた生徒がいるからと校門の前で待つていれば……緑谷。なんでお前もいるんだ」

「え……!? あ……ゞ、ごめんなさいっ！」

「……ねね、緑谷くん……この小汚い人……誰……？ ホームレスの方

……？」

校門の側に立つていたくたびれた感じの小汚い男が2人に話しか

けてきた。まるで手入れされていないぼさぼさの黒い長髪に、剃らずに放つておいたであろう無精髭を蓄えているので、初対面なら菌華の認識も間違つてはいないと言える格好だ。

しかし、一見とても不健康そうではいるが、よく見ると結構引き締まつた体をしている。それに首の周りに布のようなものを巻いており、ただのホームレスという雰囲気はしない。

菌華が小さな声で緑谷に質問すると、同じく小さい声で答えが返ってきた。

「せ、先生だよっ……!!」

「先生い……!?この……なんか……あの……合理性を突き詰めて辿り着いた結果みたいなこの人が……!?」

「……聞こえてるぞ」

『うひいっ!?』

こそそそと2人で話していたところに話の種である男からの返答が来たことで、びくりと震えながら変な声を出す緑谷と菌華。

「……まあいい、緑谷。とりあえずお前は話してる暇があればさつさと教室に行け。いいな」

「は、はいっ……じゃ、じゃあまたいつかね！菌華ちゃん！」

男が校舎を指差しながらそう言うと、菌華に別れの挨拶だけ残して、緑谷は男に言われた通りに校舎の方に走つていった。

「……さて、早速だが君はこっちだ。ああ、後これ。更衣室もこっちにあるからこれにさつさと着替えて」

「え……あ……はい……」

男は菌華に体操服のようなものを手渡すと、ついてこいと言わんばかりに手招きし、歩き始めた。よくわからない展開を前にとりあえず流れに乗つておく事にした菌華は、質問などは特にせずに男についていった。

「よし、着替えたな。じゃあ一日遅れたが、君の『個性把握テスト』を行おう」

「…………個性把握…………テスト…………？」

体操服に着替えて早々、聞きなれない単語に首を傾げる菌華。名前からしてどう言うことをするかとかは多少分かるのだが、なぜやるのかと言う部分で疑問を持っているようだつた。

「ソフトボール投げ、立ち幅跳び、50m走、持久走、握力、反復横跳び、上体起こし、長座体前屈、中学の頃からやつてるだろ？『個性』禁止の体力テスト」

「（…………最後にやつたのいつだっけな…………4年前くらいか？個性禁止って言われてもそもそも使えなかつたし…………）」

「…………おい聞いてるか？」

「えつ…………あつ、すいません…………！聞いてます…………」

男の説明を聞き、少し昔のことを思い出す菌華。そんな彼女の様子を見て上の空になつているとでも思つたのか、男は少し苛立つた雰囲気で注意をする。

だが考え方をしていただけで頭には入つていて、菌華は聞いていると答えた。…………が、しかし、

「…………いいか？俺は君が1日遅れて來たから、一度で良かつたことを君一人のためにわざわざ二度目を説明してるんだ。そういう立場なんだからもつと真剣な態度で聞け。あと、俺は同じことを言うのが嫌いだから、三度目を言わせるなよ」

「…………はい…………ホント…………すいませんでした…………氣を付けます…………」

朝のテンションは何処へやら。すっかり俯いて男に謝罪の言葉を呴き続ける菌華。

そもそも、彼女が一日遅れた理由は、ただひたすらに理不尽な運命のせいなのだが。そんなファンタジーやメルヘンにすら通用しなさそうなストーリーをただでさえ苛立つていてる先生に向かつて言った

日にはもう、怒られるを通り越してとびきり哀れみを込めた視線を送られるのは火を見るよりも明らかだ。

つまり彼女は特に聞きたくもない説教を自分の今後の体裁を守るためにじつと我慢して聞いているのだ。二度目の人生初日で担任に狂人扱いされるリスクを考えれば、このくらいならどうつて事ないのだろう。

菌華が心から反省していると分かつたのか、あるいはただ単に早く終わらせたいだけなのか、どちらかはわからないが男はやれやれと言つた感じで話を次に進めた。

「……まあいい、とにかくだ。今言つた8種目の事を“個性”使つてやつてもらう。まずは50m走からだ。時間を取つた分早くやれよ。あと、君の出した成績がクラス統計で最下位だった場合、除籍処分とする。では、始め」

「ちよいちよいちよいつ!!えつ!!今……えつ!!すいませんちよつと待つてください?今聞き間違いやなければ除籍処分とか言うおおよそ入学初日に聞くことが無いような物騒極まりないワードが私の耳に入つたんですが……?」

男は事も無げにスマホの様な機械を持ちながらそう菌華に告げた。早くやれと言う部分までは彼女も納得いっていたのだが、どうしてもその後の言葉が理解出来ず、自分の耳がおかしかつたと言う可能性にかけて男に聞き返した。しかし……

「……一度言わせるなどさつき言つたはずだ……。いいか?生徒の如何は先生の“自由”。これが雄英高校ヒーロー科だ。見込みがない者に座らせるイスは無い。ヒーローになるんだつたらこの程度の逆境は覆してみせろ?”P u l s U l t r a”。全力で“イス”を獲りに来い」

「…………!!……つわかりましたっ!!」

菌華自身も気付いてはいたが、やはり先ほどの言葉は聞き間違いや幻聴の類ではなく、しつかりと男が発した現実だつた。

それを改めて突きつけられ、理不尽への怒りか、あるいは焦燥感か、とにかく行き場の無い感情にただ歯噛みをするだけだつた。しかし、

男から自分に与えられている選択肢の中にNOやいいえは無い。

菌華は覚悟を決め、男にイスを獲りに行くと答えた。

「……よし、じゃあ始める……前に一つ聞く。準備は出来ているか？」

「へ……？」

自分のこれからを左右する試験が始まると身構えたが、あれだけ合理性と効率を求めていた男が自分から横道にそれるようなことを聞いてくるとは思つておらず、菌華は間抜けな声を出した。

「だから……準備は出来ているかと聞いたんだ。俺は君の今出せる全てを見なければならない。これは君にとつても悪い話ではないはずだ。こちらには入学前に送つてもらつた個性届で君の個性は知つているが……君がもし個性を発動する上で準備を必要とするクセなんかがあるならやつてもらつた方がいい。今の状態で除籍を確実に回避できる成績を出せそそうか？」

「えく……あく……む、無理だと思います……」

「じゃあ今すぐ取りかかれ。さつさと終わらせろよ」

「は、はいっ！」

まさかの展開に驚きながらも、願つてもいなかつた自身の個性を試せる時間が出来たことを菌華は素直に喜んだ。男は菌華の全力を見なければいけないから、と言うが、おそらく彼なりの優しさなのだと思う。

菌華は彼に心の中で手を合わせて感謝すると、言われた通り早速準備に取り掛かつた。

「（……わかる……。どうやつてウイルスを出すのか……どうやつてそれをクリーチャーにするのかが……本当に15年間使ってきたかのように……手に取るようになる……！）」

転生前に少年から知識として貰つた個性の使い方。それを駆使して、試しに菌華は上に向けた手のひらから黒いカビのようなものを放出した。

「うお……！マジで出た……！これが『T—ウイルス』か……。私は死体にしか感染しないとはいえる……ヤベーもんが今私の手のひらの上に乗つかつてんだよな……」

正直ちゃんと個性が出るのかどうか、菌華は自分の目で見るまでは半信半疑だったのだが、手のひらから何かが抜けていく感覚と同時に現れたそれを見て、ちゃんと自分も超人になっているという驚きと喜びを噛み締める。

と、同時に。人に感染しないとはいえ恐ろしいパンデミックを起こしたウイルスが自分の意のままに扱えると思うと、かなりの恐怖と覚悟もその心に芽生えた。

「んで、えつと……ゾンビの出し方は……こうか……？」

気を取り直して準備を再開した菌華は手順に従い、まずは大量のウイルスを前方の地面に放つ。そしてそれらを操り一点に集中させ、一つの黒いウイルス塊にした。

次にその塊を多少歪な人型に変形させると、人型に意識を強く込む。すると、人型の足と思わしき部位が本当の人の足へと変わる。菌華は足から順にどんどん上方へと塊を変化させて行き、最終的には人型の黒い部分を全て消して、代わりに少年から貰った女性の死体に置き換えた。

「……これは……出し方つてより作り方だな……。もう少し素早く出来れば出したように……見えるか……？。て言うかなんで服まで出てきてんだ……？そもそもこいつ今まで動くの？」

自分の分からない事が一つ、二つ、三つと瞬く間に増えて行き、参ったな、と頭を抱える菌華。しかし、背後から感じる強烈な視線が頭と手を止めるな、と訴えかけてくる。

慌てて菌華は直立不動でいる目の前のゾンビにアプローチをかけた。

「……お~い。起きろ~？」

「……ん……ああ……はい……？」

「ああ……よかつた。ちゃんと起きたな」

まずは無難にと声をかけながら頬を軽く叩いてみると、菌華が思っていたよりも早くゾンビの意識は覚醒し、彼女に返事をした。

その早さに少々驚きもしたが、遅くなるよりは圧倒的に良いので素直に安心し、ため息をこぼした。

「えつと……貴女は……」

「ごめん。説明してる時間はないんだ。諸事情あつて君には今から進化して貰うけど……異論無いよね？」

戸惑うゾンビの肩に手を置き、不気味なほど屈託の無い笑顔を浮かべながら既にほぼ決定している感じで話を進める菌華。聞き方からしてそもそもゾンビに選択肢を与えていない事がはつきりと分かる。

「え……？ いきなり何を……？」

「OK、オーダー通りたつた3分で君を強くして差し上げよう」

「ちょ……!? 私まだ何も言つてないんですけど……!!」

「えーと……？ まずウイルスを液状化させる……」うか……？ ああ出来た出来た

「話聞いてます!!」

ゾンビの意見どころかもはや言葉すら無視して、先ほどゾンビを出した時のように頭の中に入つている知識通りに事を進めて行く菌華。彼女の頭にはゾンビの使い方マニュアルはあっても、話し合いという概念はおそらく無いのだろう。

「次に……それを進化させたい対象に過剰摂取させる……？」よし、まあ九割方理解した

「……一応聞くんですけど……コップとかありますか？」

「あ、飲んではくれるんだ。で、コップだつけ？」

「はい……コップ……」

「ねえな。諦めて直だ」

既に自分の話を聞かないと理解したゾンビは進んで液状化ウイルスを飲む姿勢を見せ、せめて容れ物から飲みたいと要求するが、菌華はそれを無慈悲に断る。

もちろん無いものは無いで仕方ないのだが、もう少しオブラートに包んだ言い方は出来なかつたのか。

「……手から？」

「手から」

「……直で？」

「直で」

「……拒否権はあります？」

「ないです」

そう言つて菌華はゾンビを押し倒すと馬乗りになり、液状化ウイルスの滴る手を彼女の口目掛けて突き出した。

ゾンビは間一髪でその手を受け止め、これ以上絵面がとんでもない事になるのを避けた。

「うわあああああっ!! やめてくださいよちよつと!!」

「抵抗すんじやねえ!! 何が嫌なんだ言つてみろよほら!!」

「逆に何が嫌じやないと思つたんですか!? そんなちよつと特殊なプレイ好きな性癖なんて持つてないですよ私!! 他の人を進化させてあげればいいぢやないですか!! 第一、直で飲ませる必要多分無いですよね!?」

「また別のやつ呼ぶ時間が勿体ねえ!! あと直は素早そうだろ!? 生ハムだつてそう言つてる!! だからお前が嫌でもこつちにややる理由があるんだよ!! お前が進化するんだよ!!」

「やだああああっ!! いきなり名前も知らない人に手から何かを飲まされるなんてやだあああっ！……あっ、そうだ」

まるで暴漢とそれに襲われている少女の様なやり取りをしていると、唐突にゾンビの方が何かを思いついた。

「んむっ！ んく！！」

「何……!? 小癱な……!!」

ゾンビは唇を硬く閉ざし、加えて両手で口元を隠した。その行動に菌華は、心の底からではないが鬱陶うつとうしそうな表情を浮かべる。

子供が苦手な物を親に無理やり食べさせられそうになつている時によくやる奴なのだが、中々どうして効いているようである。

菌華のその表情を見て、ゾンビは勝つたとばかりに余裕そうな顔をした。

「……なんちやつてなあ……！」

「むぐ!!」

「さつき私はさあ……過剰『攝取』つて言つたんだぜ……！ 飲ませようとしたのは進化するのが一番速い方法……。要は体内に大量のウイ

ルスを取り込めれば良いんだよ……！」

形勢逆転とばかりに今度は菌華の方が余裕のある顔をしながら、ウイルスマみれの手を構える。

そして……。

「口が嫌なら皮膚からだオラアアアアッ！」

「ん”～～～つつ!!」

口を塞いだままのゾンビに顔面に手のひらに貯まつたウイルスをぶちまけた。それらは彼女の顔とぶつかると弾けて、墨汁のような真つ黒な飛沫が辺りに飛び散るが。ゾンビの顔に付着したウイルスは不思議な事に、その死人にふさわしい不健康な肌に染み込んでいた。

「あ～これじや足りんだろうな……つて事で追加♪」

「ん”むぐううううつ!!」

だばだばと壊れた蛇口のようにウイルスを垂れ流し続ける手のひらをゾンビの顔の上に配置し、もはや水攻めと呼べるくらいの行為をする菌華。

一方水攻めをされている側であるゾンビの肌はどんどんウイルスを吸収し、それに伴つて彼女の腕や脚は長く太く筋肉質に。女性の象徴でもある膨らんだ胸は硬く平らに。少しづつであるが変形していく。

「ほれ、おそらくもう少しだから辛抱しろ♪？」

「むぐうッ……!! グッ……ゴ……つ!!」

「おつと、結構キてるな。大丈夫か？」

ゾンビの声が驚きなどの感情を表すものから、明らかに進化による負荷に悶える声に変わつてもなお、ウイルスの投与をやめない菌華。だが少しでも心配する辺り、菌華も人としての情を完全に失つた訳では無さそうだ。

まあやつてる事は半ば拷問みたいなものなのだが。

「……さて……出来た……かな……?」

先ほどウイルスを投与する際に馬乗りになつていた菌華だつたが、進化した姿をちゃんと確認するために降りて、ただのゾンビ……だつ

た者を見下ろす。

今やあの女性らしい華奢な四肢は見る影もなく、代わりにあるのは真っ赤な血管の浮き出た丸太のような四肢。並の人間なら本気で殴れば一撃で殺れそうだ。

そして、元ゾンビにはまだ他にも特徴的な部分がある。

まず、頭髪は全て抜け落ちており、児童なスキンヘッドが出来上がっている。しかも、その頭を支える首もまた四肢同様極めて太い。もちろん、体格もその四肢や首に恥じないものであり、一見しても3メートルに迫る巨体である。

更に右胸からは心臓が露出していて。それがまるでなんでもないかのように外に飛び出したままどくどくと脈を打っていた。

だが極め付けはなんと言つても左腕だ。右腕と違い、拳や指は見受けられず、代わりに馬上槍のような鋭く長い爪が5、6本生えている。どう見ても武器だ。

以上の点を踏まえた、ゾンビよりも遙かに人間らしからぬ化け物が今、菌華の手によつて誕生してしまつた。

「……すみません……私は一体どうなつて……」

「こつちも『めんなんだが、さつきと同じように説明してる時間はないんだ。後でじっくり説明するから今は戻つておいてくれ。『タイラント』』

「ちよつと！まだですかアアアああ……」

菌華はまた質問をしようとしたタイラントと呼ばれた元ゾンビを無情にも話を聞かずにウイルスに戻すと、慌てて男の方に全力で戻る。

「すいません……えつと……あ、先生！やつと終わりました!!」

「……やつとか……遅い。8分47秒だ。次からは5分以内に終わらせるように。さて、準備も整つた事だ。今度こそ始めるぞ。さつきも言つたが50m走だ」

「(測つてたのか……)りよ、了解です！」

菌華が準備が終わつた事を伝えると、男はポケットからストップウォッチを取り出し、かちりとスイッチを押して進んでいた数字を止

めた。そこに出了時間を菌華に見せると、来いとばかり手招きしながら50m走をする場に案内した。

「さあ、準備に時間をかけた分手早く行こう。今このタイムを計る口ボを起動するから、それまでに準備体操くらいはしとけよ」「(じやあそのストップウォッチは何の意味が……)わ、わかりました……!えつと……準備体操……。つて、待て待て……?この50m走は確かに……個性使つていいんだよな……」

心の中でそう突っ込みながらも、スタートティングブロックの前で言われた通りに体操を始めようとする菌華。しかし、これは普通の50m走ではない事を思い出した。

「なら、私の脚を……タイラントの物に……!!」

これもゾンビを出した時と同じように頭の中のマニュアルに従い、今度は内部から自身の脚にウイルスを集め。すると、菌華の脚がみるみるうちに膨らんで行き、先ほどの筋骨隆々なタイラントの脚に瓜二つ。というかタイラントの脚そのものに変化した。

「イチニツイテ……ヨーイ……」

「(先生に言われた通り……本気で行く……!!)」

男が起動した口ボがスタートの合図をすると、菌華もそれにつられて脚に力を入れていく。そして、パン!と、小気味の良い音が鳴ると同時に一気に駆け出し、合図をした口ボの前を通り過ぎる。

すると、ゴールした時のタイムを口ボが計つてくれた様で、機械音声でそれを伝えてくれた。

「3秒87!」

「さんびょ……!?や、やっぱ個性使うと凄いんだな……!!」

「驚いてる暇はない。次は握力だ」

「(あら……)の世界じゃ……あんまり珍しくないのかな。この数字は……」

その結果を聞き、菌華自身もかなり驚いているのだが。男は間髪入らず、次の種目をやるために隣にある体育館に歩いていく。

菌華はそんな事を考えながらも男の後ろに着いていった。そうして体育館に到着すると。

「これを使つて握力を測るんだ」

「……これは……握力計……ですか……？」

「お前のいた中学では握力を測る時にそれ以外の物を渡すのか？」

「いや……そんな事はないんですけど……。あまりにも見慣れない形なもので……」

着いて早々に男から手渡されたのは、なんだかごついデザインの握力計。少し前まで個性などない普通の世界で生きてきた菌華からしたらそれを見慣れないのも仕方ない。菌華は珍しいものを見る様に360度からその握力計をただひたすら見た。

「……おい、さつさとやれ」

「あっ……はいっ！ごめんなさい！！」

その行動に男は再び苛立ちながら彼女を急かした。菌華は注意をされると慌てながら、今度は右腕にウイルスを集め、その身体に身体に不釣り合いな大きく太いタイラントの腕に変形させた。

「(本気……でっ!!)」

菌華はその腕で握力計を持つと、50m走同様に男の言葉を思い出しながら本気で握力計のグリップの部分を握りしめた。

すると、バギン！という何かが破損するような音が菌華の右手の辺りから聞こえた。嫌な予感がして、そつと握力計を見てみると……。「……ごめんなさい先生……握力計、壊れちゃいました……」

菌華の握ったグリップの部分が無残に碎けていた。彼女自身もまさか壊れるとは思つていなかつたのか、とても混乱した様子で握力計を男に見せる。

正直弁償云々より、この人に何を言われるかというのが一番菌華が怯えているところだつた。

「……仕方ない……それはそこに置いとけ。ロボットに掃除させておく。それより次だ」

「ええつ……!? そのつ……大丈夫何ですか……!？」

「いいから来い」

また何か言われるのかと少し身構えていたのだが、何事も無くてつい拍子抜けする菌華。

本当に良いのか……と思いながらも、早々に次の種目に移ろうとしている男に言われるがまま、壊れた握力計をその場に置いてまた彼の後ろに着いていった。

「……よし、次はボール投げだ」

「はあ……はあ……はいっ……!!」

握力を終えた後、菌華は第3種目の立ち幅跳びと第4種目の反復横跳びでそこそこの記録を出し、第5種目のボール投げに取り掛かろうとしていた。

「これをそこからあっちに向かつて投げる」

「わっ！……とど……！」

男が投げ渡してきた不思議なボールを疲れからか、受け取り損ねそうになるも、地面に落ちる前になんとか両手でキャッチした。

知識があるとはいえ慣れない事をしたせいか、菌華の表情にはかなり疲れが出ている。先程ボールを取り損ねかけたのも良い証拠だ。

「よオし……!! それじゃあ……!!」

しかし身体は疲れていてもやる気はあるようで、男の指差した位置に着くと再び右腕を変形させ、投球フォームに入った。

「1、2の……フツ飛べえ!!!」

そして、1、2の3で投げる……と思いきや、3と言う代わりにおおよそ女子高生の出してはいけなさそうなドスの効いたかけ声をあげて手に持っていたボールを彼方へと投げ飛ばした。

少しすると男の持っている機器がピピッピと鳴る。どうやら今のボール投げの結果が出たようだつた。男はそれを見ると、何故かため息をついてから菌華に結果を見せた。

「……はあ……705・2m」

「あれ……もう少し……行くと思つたんだけどな……。使い慣れてないし疲れも出でんのか……」

菌華はもはやこのくらいの記録には動じず、この世界では一般的な数字なんだろうな、と思う程度でしかなかつた。だが、男から見るとこの数字は菌華とはまた違つて見えていた。

「（……投げる時のバカみたいなかけ声もそうだが……この数値。偶然なのか、それとも……。彼女はあいつと仲は良くなるか悪くなるかは会わせて見なきや分からんが、どつちに転んでも面倒な事に変わりはない……）」

男は先日、自分の担任するクラスに入つたある男子生徒の事を思い出していた。とてもインパクトの強い奴だつたから印象に残つている。

今男が頭を悩ませている理由は、まさに菌華と彼の相性についてだ。2人は全てにおいてとは言えないにしろ、共通点が結構ある。人によつて違うだろうが、そういう奴らの大抵はとても仲が良くなるか、その逆かだ。

共通の趣味があればそこから話が広がつて親しくなる。これは割とある。だが同族嫌惡という言葉があるように、似ている者を激しく嫌う者もいる。

男としてはトラブルは全力で避けたいので2人の気が合うことを切に願つているのだが、それが実現するのはとても低確率という事も認めたくはないが理解していた。

なぜならその生徒の性格上、共通点のあるなしに関係無く菌華を滅茶苦茶に煽り倒して喧嘩に発展するまであるからだ。男は入学試験と個性把握テストでしか彼を見ていないが、彼の人となりはあらかた分かつっていた。

他人と仲良くする事からかけ離れた粗暴な者。男は雄英に入った事で変わつては行くだろうと思つてはいるが、現状の彼の評価はこれに尽きる。

まあ要約すれば、この2人の仲が良くなるなんてぶつちやけありえ

ないという事だ。良くなり過ぎても色々と不都合が出そうではあるが、悪いよりよっぽどマシである。

男はこんな者達ばかりクラスに来る自分の不安を睨うと、もうこの事について考えるのはやめた。

「えへつと……これで5種目だから……あと3つか……」

「……残りもちゃつちゃつやるぞ」

これからこの2人を会わせなければいけないとと思うと男は憂鬱な気分になるが、だからといって終わらせないわけにもいかないので嫌々ながらもテストを進行させた。

「……終わつ……たあああああつ……!!」

上体起こし、長座体前屈、持久走も立ち幅跳びや反復横跳びと同様にそこそこの結果で終わり、ようやく8種目のテスト全てをやりきると、菌華は地面だろうと構わず寝転がつて思いつきり腕を伸ばした。

「まだ結果発表が残つてる。気を抜くな」

「あ、す、すみません……!（そつか……!これでもし良くない成績だつたら……除籍……なんだよな……!!）

「んじや、パパッと結果だけ言うぞ。昨日測ったクラスの結果やその順位は見る必要は無いと判断したので省かせてもらう」

男に言われて起き上がると、このテストで今後の自分の生活が決まると言ふ事を思い出して心の中で覚悟を決める菌華。

男が口を開き、何かを言おうとするのを見ると彼女の心拍数が途端に上がつた。しかし自分は自分なりにベストを尽くしたと思い、じつと彼の口から結果を伝えられるのを待つ。

「君は最下位じやなかつた。したがつて除籍もナシだ」

「…………本当ですか？ウソとかじやあ……」

「俺はつく理由の無いウソはつかん」

「…………やつ…………やつ――」

「まあ、除籍するとかはウソだがな」

「たあああああああつ!!」

予想以上にあつさりと伝えられて菌華は思わず男に真偽を確かめたが、本当に自分が除籍されずに済んだとわかると、大声で喜びを表そうとする。

が、それを言い切る前に男から衝撃の事実もセットで伝えられ、歓喜の叫びが驚きに変わってしまった。

「君の全力を引き出すための…………合理的虚偽」

「え…………？ ちよ…………？ それも本当…………？」

「本当だ。さつ、そんな事より早く制服に着替えろ。クラスに行くぞ」「えつ…………？ ええつ…………？ ……ええくくくく？」

物凄い喜ぶタイミングを逃した事と、物凄い嘘をつかれていた事で、物凄く釈然としないまま菌華は男に急かされてまた更衣室に行き、制服に着替えた。

「よし、じゃあ着いてこい」

「…………はい」

不服、と言う感情を全力で表に出した表情で返事をしながら、菌華は男と校舎の方へ向かっていった。

「…………さて…………後よろしくお願ひしますね。『オールマイト』さん」

「…………えつ!?せ、先生…………!?」

丁度昼休みの終わりの時間帯。菌華は男にまず職員室に連れて来

られると、今度は目の前で座つているオールマイトと呼ばれた人にいきなり案内役をしてもらえる流れになつていた。

突然の出来事に彼女が戸惑つていると、どうやら菌華を任せられたらしいオールマイトという男が椅子から立ち上がり、男と菌華と向き合つた。

対面するとまず分かるのはその身長の高さだつた。流石に人外であるタイラントと比べるとあれだが、それでも菌華の目にはこちらも十分人外レベルで大きく見えていた。

しかし菌華は先ほどタイラントを見てしまつていたせいで、やはりどうしても身長や手足の太さにはそこまで驚かない。

一番驚いているのは……顔だ。そう、顔。顔がふざけてんのかと言いたくなるレベルでアメリカンなのだ。ふと、菌華は横の男の顔を見てみる。そしてもう1回目のメリケン男の顔を見る。

どう見ても違う。目鼻の位置とかそういうレベルではない。外国産のクソ厚いヒーロー物のコミックから飛び出できました、と言われても肯定しか返つてこない顔だ。

菌華はテストの疲れからか、不幸にもアメリカンコミックヒーローの幻覚が見えてしまつてゐるのかと思い、一旦、目を擦つてからもう一度再確認してみる。

元コマンドー以上に筋肉ムキムキマッチョマンのメリケン男がいる。もはやこれは現実だと認めざるを得なくなり、彼女は静かに観念した。

すると、オールマイトとやらが口を開いた。

「……なぜいきなり私なんだい……相澤くん？」

「(こつちも今知つたのかよ!!)」

どうやら菌華の案内役変更の件はオールマイト自体もたつた今聞いたようだつた。てつきり知つてゐる上でそう言つたのかと思つていた菌華は心の中で盛大に突つ込む。

しかし、その突つ込みとは対照的に男……もとい相澤は静かに返答した。

「午後からうちのクラスで授業でしょう？俺がわざわざ連れて行くよ

りも合理的です」

「だからつていきなり言わないでよ……まあいいけどさあ……」

「(なんだよその仕草!!その身体でその仕草はどうなんだよ!!)」

オールマイトは相澤の言葉を聞き、自分の人差し指同士をつつき合いながらそれを了承した。

その良いガタイからは想像もつかない行動に、またまた菌華は心中で叫ぶ。

「じゃあ俺は少し休憩を取りますが、最後に1つ言つておきます」「ん、何々?」

「絶対爆豪と何かしらあると思うので、そつちの対処も任せましたよ」「ちょっと……!相澤くんもしかしてそれがやりたくないから……!!」「では」

それだけ言い残すと、相澤はオールマイトの引き止める声も振り切つて足早に去つて行つてしまふ。

2人はそれをただ呆然と見送るしかなかつた。

「行つちまつたよ……ま、引き受けた以上はやるけどもね。む、授業まだ少し時間があるな……こらでお互い自己紹介でもしておこうか!君の名前はなんていうんだい?」

「え……あつ、む、骸牙菌華です!」

「OK、骸牙少女。ここにいるつてことは相澤くんのテストを乗り越えたんだね。おめでとう!」

「あ、ありがとうございます……!せ、先生のお名前は……?えっと……おーるまいと……先生でいいんですか?もしかして外国人の人……?」

オールマイトは職員室の壁に掛けてある時計を見てまだ少し猶予があると思い、菌華と自己紹介を始めた。

彼女が相澤のテストをクリアしたとわかると、オールマイトはそれを即座に褒める。フレンドリーでとても親しみやすいタイプの人間だ。

その言葉に菌華は照れながらお礼を言うと、今度は彼女の方からオールマイトに名前を聞いた。

「え？」

「つ！？」

「何……!？」

「え？…………え？…………？」

すると、周りにいた教師達が一斉に菌華をあり得ないものを見るような目で見た。

と思い、焦る。

るんですか……？」

卷之二

「何イ……!?

「う、うえええ～……？」

もしかしたらと思つた菌華はそう聞いてみると、さうき以上に周りから奇異の目で見られ、もうどうしていいか分からなくなつてしまつた。

「…………あ、……なんていうかな……『てあれ』！もうこんな時間じゃや
ないか!! 骸牙少女！そちらへんの説明はまた後でする!! とりあえず
行こう！」

「あつ……は、はい……！」

オールマイトがその質問の答えに困つて不意にちらりと時計を見ると、もう午後の授業が始まる10分前だつた。それに気付くと彼は慌てて菌華を連れ、すぐさま職員室を後にする。

だが……」

「私は全然問題ないです。でも授業が……」

「それならノープロブレム！なぜならこの用事のために私は授業開始の二十分前で職員室を出たのだから！」

待つていてくれたまえ」

そうして2人で菌華のクラスに向かっていると、その途中でオール

マイトが用事があると言い出した。

菌華自身は特に今すぐクラスに行きたいという事は無いのでそれを了承すると、話しているうちにオールマイトの用事があるらしい保健室に到着していた。彼は菌華にドアの前で待つて居るようだ。

そして3分ほど経つと、ドアを開けて用事を済ませたオールマイトが出てきた。

「…………なんですか……それ…………？」

菌華は思わずそんな言葉を漏らす。そう、オールマイトには明らかに保健室に入る前と後で大きく違う点が一つあつた。これを点や1つなどで評していいのかは微妙なラインではあるが、ともかく違う所がある。

そう、それは服だった。先ほどのスースツ姿が嘘みたいな奇抜な格好である。服と言うよりかはヒーローの着る戦闘服と言った感じのデザインだが。

まあ似合つて居た似合つてないかと聞かれれば彼の姿にはとても合つて居る服である。正直格好いいとさえ思った。だが、それと疑問に思うか思わないかはまるつきり別だ。

何故今から授業といふこのタイミングでそんなマントまで付いているものを着るのか、そもそも今じやなくともあまり着なさそうな服ではないのか、菌華の頭の中にあらゆる疑問が出てくるがそれらを統計し、極シンプルに、それでいて一番聞きたい回答が聞ける質問の仕方をした。

すると、それに返ってきたオールマイトの答えもまた、とてもシンプルだった。

「これかい？私の銀時代のコスチュームだ」

「…………そう…………ですか……？」

菌華は彼の言つていることの意味が全くわからなかつた。シンプル過ぎてとかじやなく、単純に言つてる意味がわからない。

求めていたものとは遙かに違う答えに、菌華はもはやもう一度質問する気力すら失せ、仕方なくオールマイトのコスチュームを受け入れ

た。

「……つと、こんな話をしている場合ではない！生徒たちが待つていいのだった！ハリーアップ骸牙少女!!」

「……はい……」

素早く手招きして急かすオールマイトイ、菌華は身体的ではなく精神的な疲れを感じた。

クラスに着いてもいなのにこの調子だと先が思いやられると自分でも思いながら、せめてクラスメイトくらいは自分と同じ価値観を持つ人がいてくれと願つて彼の後に着いて行くのだった。

第2話 2対2?いやいや32対2だよ

朝5時、菌華の家近所の公園にて

菌華「あ”あ”あ”あ”あ”あ”!!?結局ヒーロースーツのデザイン思いつかなかつたあああ！」

なんですか今日までに提出しとけつて！

こつちは社畜じや無いんですよ。ピチピチの女子高生なんですよ！」
タイラント「し、司令官、一応朝5時なので、
もう少し声のトーンを落とした方が良いかと、

その、近所迷惑と言う奴になるのでは。」

菌華「ハア、ハア、そうだな、ゲホッゲホ！ハア、もふもふの猫が撫でたい。」

タイラント「現実から目を背けないで下さい。」

菌華「1人、1人で良いから誰かぶちのめしたら思いつくと思う、多分。」

タイラント「そんな不安定な要素を信じて人をぶちのめさないで下さい。」

菌華「はー、どつかに居ねえかな、ある程度ぶちのめしても良いつて大義名分がある奴。」

菌華「だよなあ。」

???「おい黒霧、あの作戦、準備出来たんだろうな。」

声に反応して振り返つて見ると、

そこには全身手だらけの男が電話をしていた

菌華「見ろよあの電話してる奴、

お前やゾンビよりよっぽどクリーチャーっぽいぜ。」

タイラント「こら、人に後ろ指刺すもんじや無いですよ。」

菌華「いやー、でもよ、普通あんなファツシヨンしねえだろ、そこらへんに居るか?あんな奴。」

タイラント「まあ多少個性的ではありますが……。」

菌華「アレを多少個性的で済ますのかお前……でもさ、本当に居

ないよな、あんな奴、普通じゃない。」

タイラント「確かにそうですね、一般的に居ない。」

菌華「『おい黒霧、あの作戦、準備出来たんだろうな。』あの作戦、フフ、おいタイラント、もしかしたらあいつはぶちのめしても良い大義名分があるかもしねんぞ。」

タイラント「でも司令官、たとえそれだつたとしても市街地での個性発動は禁止なんじや？」

菌華「バカお前、私はあなたと正体に気付いてますよって雰囲気で行つて相手が個性で攻撃して来たらこつちの攻撃はある程度正当防衛だろ。」

タイラント「・・・やり過ぎないで下さいね、あくまで正当防衛が大義名分なんですから。」

菌華「分かつてるよ、一発だけな、じゃ話しかけてくるわ。」

???「分かつた、じゃあ今から帰る（ピツ）」

菌華「ヘイそこのお兄さん。」

???「あ？」

菌華「あんた不思議な格好してるねえ、人の目とか気にしないの？」

???「チツ、ガキは帰つて寝てn

菌華「いや、人の目を気にしないんじゃない、まず人に見られいんじやないのかな？」

???「・・・はあー、勇敢なこつて。」

菌華「そりやどうも。」

???「褒めてねえんだよ！（グアツ）

男は突如叫ぶと私の腕の肘のちょっと下辺りを掴んできた、えつ何？セクハラ？と、思つたら掴まれた部分が崩れて来た

菌華「ん？へえ、腕が崩れて行く、

あなたの個性か、まあ効かないんだけどね。」

???「何？」

菌華「（ぞるぞるぞるぞる！）

崩れた腕の断面からウイルスを触手の様に伸ばし

崩れ落ちた手首の断面にくつ付けた、
そして手首を引き寄せ腕にくつ付けた、

足りない部分はウイルスで補強した、一見もう腕は再生した

菌華「今日の昼飯はカロリー高いもん食わないとな、
また崩れて来ちやうし。」

??? 「!!? 何だと!!?」

菌華「良いねその驚いてる感じ。」

??? 「なんて個性だ!!?」

菌華「とっさに出て来る言葉がそれって、
教えるわけないだろ『ヴィラン』お前敵に塩送んのか？」

??? 「チツ見逃してやる、さつさと行きな。」

菌華「は？ 何言つてんだお前？」

言うとしてもそれは私のセリフだ。」

??? 「なんだと？」

菌華「良いか？ 今私は人を無性にぶちのめしたいんだ、
理由は言わんがな。」

??? 「ツ!!? 頭イかれてんのか！」

菌華「失礼な、私からしたらヴィランの方が頭イかれてると思うわ、
じや、私の為に死んでくれ。」（めきめきめきめき）

??? 「何!!?」

菌華「じや、さよなら、（ブオン！）」

??? 「マズい！（サツ、ドツゴシヤア！）何てパワーだよ、

コンクリートがビスケットみたいに割れたぞ・・・マズイな、
(ピッポッパッ、プルルルル、プルルルル、ピッ)

黒霧「もしもし？ 死柄木弔？ どうかしましたk

死柄木「ワープで俺を助けてくれ！
今追われてる！」

菌華「ワープ？ 厄介な、まあ良いわ、
もう一発打つちやつたし、じやあの、死柄木弔さん。」

死柄木「・・・・崩した腕が再生したり腕が巨大化したり、
個性が分からぬ、あいつ、本気で俺を殺しに来てた、出来れば二

度と会いたくないな。」

一方その頃菌華サイド

タイラント「お疲れ様です司令官。」

菌華「ああただいま、ぶちのめさなかつたけどヒーロースーツのデザイン思い付いたわ。」

タイラント「良かつたですね、でも今から提出して間に合うんですかね？」

菌華「最悪八百万さんに頼むわ。」

タイラント「全くもう。」

菌華「それにしてもさつきの奴なんだつたんだろう？」

タイラント「予備知識があるんじゃないんですか？」

菌華「実はヒーローを目指すつてところしか知らなかつたんだよね。」

タイラント「それを予備知識が無いと言うんですよ？」

菌華「趣旨知つてんだつたら充分だろ多分、よし書き終わつた、じや、家入ろうぜ、

いつまでも公園に居たら冷える。」

タイラント「はい。」

菌華「そうだな、唐突なんだけどさ。」

タイラント「?はい。」

菌華「お前の姿もうちょい縮めて良い?」

タイラント「具体的にどのくらいですか?」

菌華「いやーウイルスの大元の私ならお前の姿くらい簡単に操れるんじやないかなつて思つてさ、

私としてもいつも横に大男だと目立つしさ。」

タイラント「大男と言つても性別なんて無いんですけどね。」

菌華「あと見た目つて大事だと思うんよ、

お前言葉遣いも丁寧だしさ、だからお前の姿変えていい?」

タイラント「ダメつて言つてもやるでしよう?」

菌華「じゃ、変えるぜ(みしみしみし)」

タイラント「割と痛い(みしみしみし、ボシュウ)」

菌華「ほいおつけー、じゃ、今日の授業でお前に手伝つてもらうつ
もりだつたしみんなを驚かしてやろう。」

タイラント「随分と華奢な体になりましたね。」

菌華「能力とかはいつも通りだよ。」

タイラント「それより準備しなくて良いんですか?」

菌華「へ? フアツ! もうこんな時間! やべ! さつさと準備して
パンくわえてダツシユだ!」

タイラント「こんな性格の人に恋愛フラグなんて立たないでしょ
よ。」

菌華「本当に急いでんだよ! お前もうウイルスに戻つとけ。」

タイラント「ああああ溶ける!」

菌華「急げええええ!」

移動中

菌華「ギリギリセーフ! ? (ガラガラガラ!)」

八百万「あらおはようございます骸牙さん

菌華「ごめん八百万さん! この紙に書いてあるデザインの服
作つといてくんない!? 耐久とかは気にしなくて良いから!」

八百万「えつ、はい分かりました。」

菌華「さんきゅ! こんどなんか奢るわ!」

相澤「はいおはよう席につけ、今日は2対2の戦闘訓練と言う事
で、骸牙、ちゃんとヒーロースーツのデザイン提出したか?」

菌華「昨日の内に出来なかつたんで八百万さんに耐久性をガン無視
した物を作つて貰う事にしました。」

一同「それ1番無視されちゃいけない所!」

相澤「次からは間に合う様にしろよ。」

菌華「あいあいさー。」

八百万「骸牙さん、出来ましたわ。」

菌華「速いな君。」

八百万「では約束通りこんどガリガリ君と言う物を奢つて下さい。」

菌華「さてはお主お嬢様だな?」

相澤「じゃあお前ら各自ヒーロースーツに着替えたらバスに乗れ。」

一同「はーい。」

女子更衣室

菌華「・・・なんか胸が縮んだ気がする、病気かな?」

麗日「それ女として1番きつい病やね。」

菌華「まあウイルスで取れた腕くつ付けたりとか出来るから脂肪を胸に集めるくらい朝飯前なんだけどね。」

耳郎「それ他人にも出来る?」

麗日「食い付きが凄い。」

菌華「出来るけどゾンビになる可能性極めて高いよ?」

耳郎「・・・やめとく。」

菌華「賢明だ。」

蛙吹「と言うか菌華ちゃん、その服絶対男の人が着る服よね、ケロ。」

八百万「私もリクエストを貰った時にはびっくりしましたわ。」

今私の服

「背中に赤文字でBIOHAZARDの刺繡が入った

黒い革ジャンとその下に赤いTシャツ」

「黒いGパン」

「黒の指無し革手袋」

見事に黒と赤だけで形成されていた。

菌華「あとはこれを先生に届けて伸縮性抜群のやつ作つて貰うだけやな。」

一方男子更衣室

峰田「おい見ろよみんな!ここに穴があるぜ!」

上鳴「何!?それはまさか!」

峰田「そうよ!覗きあん

菌華「おつ!この穴なんか嫌な予感がするからカレンダー掛けとこうぜ!」

峰田「ちくしょおおおおお!」

相澤「お前らー、女子は着替え終わつたぞー。」

飯田「ほら行こう峰田くん。」

峰田「くそお、くそお。」

その後も峰田くんがゴネて動かなかつたので仕方なく相澤先生が引きずつて來た。

相澤「全員乗車したな？ 発車するぞ。」

（ガツクンガツクン）あははははは！ （ガツクンガツクン）
（ガタツガタガタガタツ！）ひやーめっちゃ揺れる楽しー！

相澤「そこ、黙れ。」

菌華「・・・・・。」

相澤「何も全てに絶望しろとは言つてないぞ。」

菌華「私テンション高い時はそれに見合つた行動をしないと死ぬんです。」

相澤「マグロか？」

菌華「カツオです。」

相澤「どつちでも良い。」

菌華「私カツオの方が好きなんです、先生魚なら何が好きですか？」

相澤「・・・俺はホタテかな。」

菌華「たつた今魚つて言つたんですけどね。」

相澤「生き物と言うくくりでは一緒だろ。」

菌華「範囲広すぎやしませんかね。」

相澤「じゃあ海の生き物。」

菌華「それでも広いですよ。」

相澤「・・・ウナギが好きだ。」

一同「押し負けた！」

菌華「てか相澤先生、揺れるバスの中で

ガツクンガツクンする以外の楽しみ方なんて有るんですか？」

相澤「そうだな、しりとり。」

菌華「この大人数で？」

相澤「景色を楽しむ。」

菌華「大量の訓練場しか目に映つて来ないです。」

相澤「・・・周りに迷惑掛けない程度にやれよ。」

一同「また押し負けた！」

菌華「（ガツクンガツクン）ヒヤツフー！ヤツフー！（ガツクンガツクン）あつ、そうだ相澤先生。」

相澤「なんだ？」

菌華「ヴィランに遭遇した場合どうすれば良いですか？」

相澤「基本的に逃げろ、それでも襲つて来たら応戦しな。」

菌華「ありがとうございます。」

相澤「なんかあつたのか？」

菌華「いや、今日の朝たまたま外を散歩してたら

怪しい人を見つけたんで話しかけたらヴィランだつたんですよ。」

一同「なつ！？」

菌華「で、襲つて来たんで一回だけ攻撃して帰つてもらつたんですけど。」

相澤「怪我は！？」

菌華「腕をもぎもぎされました。」

相澤「・・・見た所両方とも無事の様だが？」

菌華「ウイルスで補強してるんですよ、でもカロリー高いもん食べないといつか取れますけどね、あつ、血は出ませんからご心配無く。」

相澤「お前に弱点は無いのか。」

菌華「頭が弱点ですね、吹つ飛ばされたら終わり、

それに再生つつーか新陳代謝の異常促進による回復もかなり労力使うんすよ、自身の強化もね、それにゾンビの戦闘力は量と質に左右されますしね。」

相澤「弱点が無いわけではない、と。」

菌華「絶対に勝つ勝負とかつまんないですよ。」

相澤「そういえばお前が襲われたヴィランの情報あるか？名前だけでも良いんだ。」

菌華「死柄木弔、個性は崩壊、恐らく手が触れた物を徐々に崩壊させていく個性です、発動条件は分かりません、本人の意思関係無く発動するのか触れている面積なのか触れている時間なのか、それと全身に手を付けています。」

相澤「手を付けている?」

菌華「まあ一目見りや分かりますよ、

悪趣味なアクセサリーミたいなもんでしょう、
それと電話で思わぬボロを漏らしました。」

相澤「ボロ?」

菌華「奴は何か良からぬ計画を立てている事と
奴の仲間にワープの個性を持つ人物が居る事。」

相澤「計画、だと? それにワープの個性。」

菌華「まあ計画つて言うくらいだしデカイ事考えてんでしょう…:
例えばオールマイトの抹殺とか。」

相澤「まさかな。」

菌華「ですよねー。」

相菌「はつはつはー。」

緑谷「えつとつまり菌華ちゃんがヴィランと戦つて追い払つたつて
事?」

菌華「そゆこと、いやー良かつたね対峙したのが私で、私以外の
人だつたら腕が使えなくなつてたもんね、
いやー良かつた良かつた。」

相澤「着いたぞ、ここが今回の演習場だ。」

上鳴「でつけえー!」

切島「おい!あれ!」

一同「オールマイト!!?」

オールマイト「始めようか有精卵共!!? 戰闘訓練のお時間だ!!?」

飯田「先生! ここは入試の演習場ですが、また市街地演習を行うの
でしようか!!?」

オールマイト「いいや! もう一步先に踏み込む! 屋内での対人戦闘
訓練さ!」

飯田「勝敗のシステムはどうなりますか?」

爆豪「ブツ飛ばしてもいいんスか」

芦戸「また相澤先生みたいな除籍とかあるんですか?」

八百万「分かれるとはどのような分かれ方をすればよろしいです

か

青山「このマントヤバくない？」

オールマイト「んんん、聖徳太子イイ!!」?

骸牙「ルール説明しなくて良いんですか？」

オールマイト「そうだな骸牙、少年？」

骸牙「そうですよ、あと少女ですけどね。」

オールマイト「それは悪かつた！それでルール説明だが状況設定は
ヴィランがアジトに核兵器を隠していてヒーローは

それを処理しようとしている！ヒーローは制限時間内に
ヴィランを捕まえるか核兵器を回収する事。

ヴィランは制限時間まで核兵器を守るかヒーローを捕まえる事。」

オールマイト「コンビ及び対戦相手はくじだ！」

飯田「適当なのでですか!?」

緑谷「プロは他事務所のヒーローと急造チームアップする事が多い
しそういう事じやないかな。」

飯田「そうか！先を見据えた計らい失礼しました！」

オールマイト「じゃあ早速くじを引いてくれ！」

コンビ	A	緑谷、麗日
コンビ	B	砂糖、口田
コンビ	C	障子、峰田
コンビ	D	爆豪、飯田
コンビ	E	骸牙、八百万
コンビ	F	上鳴、耳郎
コンビ	G	芦戸、蛙吹
コンビ	H	葉隠、尾白、青山
コンビ	I	切島、瀬呂
コンビ	J	轟、常闇

八百万「よろしくお願ひしますね骸牙さん。」

菌華「おうよろしく、八百万さんと組めたら良いなって思つてたんだよ。」

八百万「・・・何か策が?」

菌華「ああ、それはな、ごによごによ。」

八百万「そんな事可能でしようか。」

菌華「大丈夫だ、ごによごによ。」

八百万「ではそれで行きましょう、始まり次第取り掛かるのでその間敵をお願いします。」

菌華「任せな。」

オールマイト「最初の対戦は・・・こいつらだ!」

Aコンビがヒーロー! Dコンビがヴィランだ!

ヴィランチームは先に入つてセッティングを!

5分後にヒーローチームが潜入スタートする。他の皆はモニターで観察するぞ!」

その後も対戦は続き私たちは最後となつた

オールマイト「最後の対戦はこいつらだ! Jコンビがヒーロー! E

コンビがヴィランだ!」

骸牙「よし、じやあいつでも出来るようにお願いな。」

八百万「いつでも準備オーケーです!」

オールマイト「では! 屋内戦闘訓練 開始!」

骸牙「じや、相手してくる!」

八百万「お願ひします!」

轟、常闇サイド

常闇「どつちが来ると思う?」

轟「骸牙一択だ r

骸牙「呼んだかな!!?」

常闇「なつ!!?」

轟「やつぱりか! (バキバキバキバキ)」

骸牙「氷か! 冷えるのは嫌いなんだよね! よつと! (パツキン

!)」

轟「叩き割つた!!?」

骸牙「やつぱり良いなあ、人が驚いてる表情、

ついでにもう一つ驚かせちゃおうか、タイラント!」

轟「（タイラントってあのデカイ奴か！）」

体から出たウイルスが徐々に集まり人型を形成していく
タイラント「お呼びでしょうか？ 司令官。」

一同「なつ！ 何イイイイ!!？」

みんなが驚くのも無理はない、昨日見たタイラントの風貌とは
もう人型と言う所くらいしか共通点が無いのだ、

それもそのはず今のタイラントの見た目は

10人中10人が見惚れるであろう整った顔立ちに赤い目をした
銀髪ロングの女性なのだ、歳は20歳～22歳くらいになる様に設定
したが見た目から予想するにその通りになつた様だ、全身を秘書服で
包んでいるがタイラントの皮膚の性質と見た目を服に変えただけで
ある、触つたら違和感バリバリだけど、後で本物買つてあげよう。

轟「骸牙！ 昨日のタイラントはどうした！」

菌華「ん？ だからそいつだよ？」

いつまでもあの見た目だと目立つしね、

それと、能力は変わつてないから気を付けてね。」

常闇「何？」

骸牙「じゃ、タイラント、私は別の用があるから
どつちか1人抑えててね、

あつ、痛めつけちやダメだよ？ 殺つてもダメ、じゃよろしくー。」

タイラント「分かりました・・・では、司令官の命により

あなた方どちらかと手合させ致します、

轟様ですか？ 常闇様ですか？ いつでもどうぞ。」

タイラントは丁寧な口調で淡々と話す

常闇「轟！ 先に行け！」

轟「ツ!! 分かつた！」

タイラント「常闇様ですか、ではよろしくお願ひいたします。」

常闇「行け黒影！」

黒影「負ケルカアー！」

タイラント「ふつ！ （ブオツ！）」

黒影「（ドゴツ！）グツ、ヌアアアアアア！」

タイラントが黒影の横つ面に後ろ回し蹴りを見舞う、黒影はそのまま吹っ飛んでいった

常闇「な、に？」

タイラント「ふむ、面白い個性ですね。」

常闇「黒影！大丈夫か！？」

菌華サイド

菌華「ただいまー！八百万さん！アレ出来てる！？」

八百万「お帰りなさい！出来てますよって轟さん付いて来ています！」

菌華「分かつてるとよし！出て来なアンデッド！（ぞるぞるぞるぞるぞる！）」

ゾンビA「お呼びですか？」

菌華「もう叫んだりしないんだ。」

ゾンビA「アレは皆さんのゾンビのイメージを

崩さない為にちょっと。」

菌華「まあ良いや！お前らそこに転がってる棒掴んでそこのオブジエ守れ！」

ゾンビ達「イエツサー！」

轟「こんな事も・・・。」

八百万「（これが、骸牙さんの作戦。）

菌華『ああ、それはな、まず私が2人に牽制しに行くからその間に八百万さんは棒みたいな物を29本作つといてくれ、で、ある程度牽制したら帰つて来るんだがその時にあの2人を分断させる。』

八百万『そんな事可能でしょうか。』

菌華『大丈夫だ、タイラントを置いてきて

どつちかを抑えててもらう、あつちからしたらタイラントを抑える為に1人残すんだろうが、

まあ多分常闇君がタイラントと戦つて轟君が追つてくると思う、

それでこつちは私が出せる残り29体のゾンビを八百万さんが作ってくれた棒を持たせて核を守る、

まあ作戦とも呼べねえ様なお粗末なもんだけね。』

八百万『ではそれで行きましょう、

始まり次第取り掛かるのでその間敵をお願いします。』

菌華『任せな。』

八百万『（まさかここまで予想通りに事が運ぶとは。）』

轟「凍れ！（パキパキパキパキ！）」

ゾンビA「わつ、冷たつ！」

ゾンビB「足が凍つてる！」

ゾンビC「ひやー。」

菌華「焦るなもげるぞ！オイそこの！
こいつらの足の氷を碎いてやれ！」

ゾンビD「はい！」

菌華「そこの5人！投擲！」

ゾンビ達「はい！（ブンツ！）」

轟「チツ！（ガキン！）」

菌華「氷で防いだか・・・ん？ヒビが出来てる？

あの程度の攻撃で？・・・、そこの3人！核の右固めろ！そこの2
人は上に注意！」

ゾンビ達「はい！」

八百万「（なぜ天井に注意を？）」

ゾンビE「上からつららが！防御しろ！（ガギンガギン！）」

轟「・・・なぜ分かつた。」

菌華「ゾンビの投擲程度で氷にヒビが入ったのに違和感を感じて
ね、どつか別の場所に力を入れてたとか無い限りそんな事ある訳ない
と思ってさ、その柱から凍らせてたんでしょ？さつきからそこ中心に
動いてたもんね。」

轟「・・・なるほど、その的確な指示、司令官の名に相応しいな。」

菌華「イケメンに褒められると嬉しいな、そこの6人！左固めて！」

轟「・・・読み勝つたぞ。」

菌華「何!?？」

ちよつと待つて左に来ると思つてたのに右から氷迫ってきたんだ

けど！

菌華「あああああ！冷たいいいい！」

八百万「骸牙さん！」

菌華「まだまだ！（クルツ、スタッ。）」
間一髪空中で回つて助かつた、めつちや冷たい

轟「やるな。」

菌華「どうも！」

一方その頃常闇サイド

タイラント「やつ！（ブオツ！）」

常闇「ぬつ！（サツ）黒影！」

黒影「ヌン！（グオツ！）」

タイラント「（ドゴツ！）くつ！（ザザザザザザ）」

常闇「（・・・どうだ？）」

タイラント「今のはかなり良いのを貰つてしましましたね。」

常闇「（どういう事だ？先ほどまでなら
避けられていたはずだが・・・。）」

タイラント「恐らく司令官が残りの29体全てのゾンビを上階で出
しているんでしょうね、その影響で私は力が落ちていると考えられま
す。」

常闇「そういうえば骸牙がバスで言つっていたような。」

オールマイト「ヴィランチームW I N！」

常闇「・・・終わつたか、そして負けた。」

タイラント「・・・私は楽しかつたですよ、常闇様。」

常闇「！今なんt

タイラント「（ダツ！）」

常闇「・・・明らかに相手の方が強かつた、楽しかつた、か。」

轟サイド

轟「負けたか。」

菌華「ふあー！疲れたー！」

八百万「私もです。」

菌華「轟君強過ぎんよー！」

ゾンビ達「じゃ、我々はこれで。」

菌華「ああ、助かつたよ。」

ゾンビ達「では（トプン、ぞるぞる）」

八百万「そうやつて戻るんですね。」

菌華「触らないようにね、ウイルスの塊だから。
さて、もうすぐタイラントも戻つて来るやろ。」

タイラント「（スタッツ）お疲れ様です司令官。」

菌華「おお来たか、じゃ、行こうか。」

移動中

オールマイト「お疲れ様諸君！では今戦のベストを発表する！今戦

のベストは、骸牙君だ！」

菌華「私イ？」

オールマイト「そうだ、仲間への優秀な指揮、相手の作戦を瞬時に
見破る洞察力、轟君の言う通り司令官の名に相応しい働きだつた！」

菌華「ありがとうございます……ところでオールマイト。」

オールマイト「ん？ 何かな？」

菌華「そろそろ何か食べないと腕がもぎもぎしそうなので学食食べ
に行つても良いですか？」

一同「ええええええ!?」

菌華「じゃ、そーゆう訳で（ダツ）」

オールマイト「あつ、行っちゃつたか……、誰かももげる理由知ら
ないか？」

相澤「ヴィランにやられたらしいですよ。」

オールマイト「なつ！ 詳しく話したまえ！」

相澤「それは職員室でゆつくり、とりあえずこいつらをあつちに連
れて行きましょう。」

オールマイト「……そうだな、では諸君！ 戰闘訓練の授業はこれ
で終わりだ！ バスに乗れ！」

一同「はーい。」

第2話 2対2？いやいや32対2だよ 終わり

次回 根に持つタイプにケンカを売るな

第3話 根に持つタイプにケンカを売るな

朝5時半

飯田天哉は日課のランニングをしていた、この後もいつも通り家に帰り朝食を済ませ学校に行くのだろう、そう思っていた。

菌華「おいゴルア！そんなもんでもヘタれてたら幹部になるなんて夢のまた夢だぞオツラーン！？」てかまずヘタれんな！」

ゾンビ「い、イエツサー！」

公園でクラスメイトが部下と思しきゾンビにスパルタ指導をしていた

飯田「骸牙君!?」

菌華「お、飯田君じゃないか、おはよう、ランニング？」

飯田「あ、ああそうだが、君は何をしてるんだ？」

菌華「こいつが幹部になりたい一つから最高司令官直々にトレー
ニングしてる。」

飯田「幹部？階級制があるのか？」

菌華「と言つても私＜進化体の奴ら＞ただのゾンビ、もしくは虫とカラスとかつて感じなんやけどね。」

飯田「進化体、タイラントさんみたいな物か？」

菌華「そうそう、今新型ウイルスの作成もしててさ。」

飯田「新型ウイルス？」

菌華「そう、とりあえず横文字の液体と私の作つたウイルスを混ぜてるだけなんだけど。」

飯田「そうなのか・・・。」

菌華「そろそろ新しい死体が欲しいよ。」

飯田「死体なんてそういう手に入るものじゃないからな。」

菌華「そうなんだよ、私も合わせて兵力31じやゾンビの持ち味数の暴力が発揮出来ないからなあ。」

飯田「その為に一般兵を一騎当千の進化体にするって事だな。」

菌華「そゆこと。」

飯田「おつと、邪魔をして済まない、じゃ、また後で。」

菌華「はいよ。」

ゾンビ「…司令官、自分の進化体は何になると思われますか?」

菌華「うーんそうだな、このままもうちょい基礎鍛錬してから今あるウイルスを大量に投与すれば私が決めれるんだが、新型ウイルスの場合何になるか分からんのよなー。」

ゾンビ「…自分は出来れば新型が良いです。」

菌華「アホウ、その前に私が飲んで量産出来るようにするわ。」

ゾンビ「そうでしたね。」

タイラント「しゅれい～か～ん～！」

菌華「ゲツ、タイラント!!? 私なんかやつた!!?」

タイラント「なんかやつた!!? ジやないですよ！あなたまた私のクローゼットに可愛いワンピース類入れましたね！」

菌華「良いじやんよ！いつも秘書服とか堅つ苦しいじやん！それにお前が女性と認めなくとも見た目は可愛い女性なんだからさあ！せめて買い物の時だけでも着て行きなよ！超絶フリフリつてわけじゃないんだから普段着として着ても違和感無いよ！性別不明なら見えた目からして女の子っぽくしたら良いじやん！」

タイラント「じゃあせめて私に言つてからにして下さいよ！」

菌華「それは悪かったよ！」

ゾンビ「お二人共、近所迷惑極まりないです。」

菌タイ「ごめんなさい。」

タイラント「それより司令官、お風呂湧きましたから入つて下さい。」

菌華「はーい、じゃ、今日の訓練はここまで、また明日な。」

ゾンビ「ありがとうございました！（トプン、ぞるぞる）」

菌華「よし、はよ帰つて風呂風呂つと。」

風呂場にて

菌華「とりあえず、身体洗つてと（カチツ、シャアアアアアア）アイエエエエ！シャワー！？シャワーナンデ！？しかも熱湯だしあついし！（つるつ）おおつとつとつと、（バツシャアアアアン！）あ”あ

“あ”あ”あ”風呂も熱湯じやねえか！おいゴラタイラントオ！なんでこんなやり返し方！？おまつ！55度とか！風呂じやなくてお前の頭が沸いてんじゃねえのか！？極度の寒がりでもこんな温度設定しねえよふざけんな！てかなんで55度まで上げれんだよこここの風呂！”

タイラント「お呼びですか？」

菌華「お呼びですかじやねえよ！そりや勝手にクローゼットにワンピース入れたのは悪かつたよ！だけどな！熱湯風呂つてなんだ！私はダチョウ俱楽部じやねえんだぞ！？押すなよとも言つてねえしよ！」

タイラント「そんな事より学校行かないと行かないのでは？」

菌華「・・・まあ良い、これでおあいこな。」

タイラント「分かりました、ではここに制服と鞄を置いておきますね。」

菌華「出来ればこのお嬢様みたいな扱いも止めて貰いたいんだがな、じゃ、行つてきまーす！」

タイラント「行つてらっしゃいませ。」

菌華「（ガチャ）おつ、出久君おはよー。」

緑谷「あつ、菌華ちゃんおはよう、なんかさつき盛大な悲鳴が聞こえたけど。」

菌華「朝イチに55度の熱湯に飛び込みや誰でも悲鳴を上げるだろ。」

緑谷「そりや上げるね。」

移動中

菌華「（ガラガラガラガラ）おはようございまあああす！」

爆豪「朝からうるつせえな！黙れや！」

菌華「昨日言つたじやん！その時のテンションに合わせて行動しないと死ぬつて！」

一同「あれマジだつたんだ！」

爆豪「じやあ死ね！」

菌華「死にたくないから今テンション高いんだよ私は！」

爆豪 「死ねつつってんだろ！」

菌華 「嫌だつて言つとろうが！」

爆菌 「アン!?？」

爆菌 「ハモらせてんじやねえよ！」

相澤 「はいはいストップストップ、さつさと席につけー。」

爆豪 「チツ、覚えてろよゾンビ女。」

菌華 「こつちのセリフじやBOMヘッド。」

爆菌 「てめえ今何つた!?？」

相澤 「さつさと席つけ（低音）……で、今日のヒーロー基礎学だが、俺とオールマイト、そしてもう一人の三人体制で見ることになつた。」

瀬呂 「ハーバー！何するんですか!?？」

相澤 「災害水難なんでもござれ『人命救助レスキュー訓練だ！』

上鳴 「レスキュー……今回も大変そうだな。」

切島 「バカおめー！これこそヒーローの本分だぜ！鳴るぜ！腕が！」

蛙吹 「水難なら私の独壇場ケロケロ。」

相澤 「今回のコスチュームの着用は各自の判断で構わない。中には活動を限定するコスチュームもあるだろうからな。」

私は伸縮性だけを重視したから限定はしないな、その点では便利相澤 「訓練場は少し離れた場所にあるから今回もバスに乗つていく。以上、準備開始。」

その後準備が完了しバスに乗り、特に何のトラブルも無く訓練場に着いた。その訓練場は、炎で包まれている小さな町や、巨大なウォータースライダーのようなものがある場所など、まるでテーマパークみたいな感じだつた。

13号「水難事故、土砂災害、火事、エトセトラあらゆる事故や災害を想定し、僕がつくつた演習場です。その名も、ウソの災害や事故ルーム！略してU.S.J.!」

デフォルメされたような宇宙服を纏つたスペースヒーロー13号がそう言つた。てかU.S.J.つてそのネーミング大丈夫か？大丈夫か？（再確認）

13号「えー始まる前にもお小言を一つ二つ、三つ、四つ。」

増えてんぞ

13号「皆さんご存知だとは思いますが僕の個性はブラックホール。どんなものでも吸い込んでチリにしてしまいます、その個性で僕はどんな災害からでも人を救い上げてきました、しかし、簡単に人を殺せる力もあります、皆の中にもそういう個性がいるでしょう、超人社会は個性の使用を資格制にし、厳しく規制することで一見成り立っているように見えます、しかし、一步間違えれば容易に人を殺せるいきすぎた個性を個々が持っていることを忘れないでください、この授業では、人命のために個性をどう活用するかを学んでいきましょう、君たちの力は人を傷つける為にあるのではない、救ける為にあるのだと心得て帰つてくださいな。以上ーご静聴ありがとうございました。」

13号先生の演説は素晴らしいかった、だが次の瞬間すぐに忘れてしまった。

相澤「塊になつて動くな！」

相澤先生が声を張り上げた

相澤「13号！生徒を守れ！」

切島「何がありや？また入試ん時みたいなもう始まつてるぞパターン？」

相澤「動くな、あれはヴィランだ。おい骸牙、あいつお前が言つてたやつじやねえk

菌華「し、」

一同「し？」

菌華「死柄木弔！」

死柄木「何だ？！？あいつはこの前の！」

菌華「・・・、相澤先生、戦闘許可を。」

相澤「・・・良いだろう。」

13号「おいイレイザーヘッド！？彼女は生徒だぞ！？」

相澤「とは言つても行つちまつたぞ。」

13号「なつ！戻つて来なさい！」

死柄木「おい、こっち向かって来てねえか?」

黒霧「向かつて来てますね、確実に。」

菌華「しいいいがああらああきいい! (ズダン!)」

階段を駆け下りた私は死柄木の目の前に飛び降りた、と同時に

菌華「とりあえずこれ腕の借りな! (ブオツ!)」

死柄木「(みしみし!) ぐあつ! (ドオオオン!)」

蹴り飛ばした

黒霧「死柄木弔!」

菌華「さて、どうする? 先制攻撃は貰つたぞ? 秘策でも無い限りゲームオーバーじゃないか? まあ秘策があるからオールマイイトの居るここに来たんだろうがな、早く出せよ。」

黒霧「・・・良いでしよう、お望み通り! (バサツ!)」

なんか黒いカビみたいな奴がカビを広げる、するとそこから脳丸出しの紫ムキムキマツチヨメンが出て来た、バイオに居てもおかしくねえなこいつ

黒霧「行きなさい、脳無。」

菌華「タイラント、そいつ任せたわ (ぞるぞるぞるぞる)」

タイラント「了解しました。」

菌華「出来るだけ綺麗にな。」

タイラント「承知しております。」

黒霧「おやおや、まさか貴女一人で戦うつもりですか?」

タイラント「・・・それが何か?」

黒霧「いえ、未知の敵に一人で立ち向かうとは余りにも無謀だと思いまして。」

タイラント「・・・(ブオツ!)」

脳無「(ドゴツ!) ・・・・・・」

タイラントの蹴りが脳無とやらの顔面に不気味なくらい完璧にクリーンヒットした、だが反応を見せない、と、次の瞬間

脳無「(ゴウツ!)」

タイラント「(みしみしみしみし! ドツ! ガツ! ゴシャア!)」

タイラントが殴り飛ばされみんなの居る所のちょっと下の階段に

めり込んだ

死柄木「脳無は対平和の象徴の怪人だ、あの女は死んだ、てめえ1人でやれんのか?」

菌華「・・・・くつ、ふふふつ、あははははは！対平和の象徴の怪人!? その程度の肩書きなのかよあのマツチヨメン！あはははははははは！」

死柄木「チツ、やつぱり気味が悪いいな。」

菌華「あはははは！お前に言われたかねえよ！良いか!? タイラントはな！」

タイラント「(ドゥツ！ベギイ！)」

菌華「戦争で大活躍するはずだつた生物兵器だよ。」

脳無「(グラア、ドシャ。)」

黒霧「なつ!? あの距離から一瞬で!? しかも脳無が、一撃でやられた!?!？」

菌華「全く、黒カビさんよお、さつき未知の敵に1人で立ち向かうとは余りにも無謀、とか言つてたよな、現状地面に伏せてんのはどつちだ？ 多分脳無つて奴じやオールマイトイは殺せないぜ、かなり高確率でな。」

死柄木「バカな！シヨツク吸收の上限をたつた一撃で壊しただと!? ?」

菌華「いやー、流石に私もここまでやるとは思わんかつたわ、クリーチャー操作用のウイルス全部あいつに回したらどうなるかとか実験したかつたから丁度良かつた、それにあんな良い実験材料も寄付してくれるなんてな、君らもしかしてボランティア団体さんか何か？」

タイラント「司令官、残りはどうしますか？」

菌華「じゃああそこのカビとこの手男だけ残してそれ以外氣絶させてあそこの入口に集めといて、投げても良いから。」

タイラント「了解しました。」

菌華「・・・じや、死柄木クン、君の好きなゲームの始まりだ。」

一方タイラントサイド

タイラント「(ぽいぽーい)フルパワー出したのは初めてだけど爽快

だつたな。」

相澤「・・・手伝いましようか？」

タイラント「いえ、このくらいお手を煩わせるほどでは。」

相澤「そうですか。」

タイラント「・・・では入口に投げたヴィランを捕縛しといてくれますか？」

相澤「分かりました。」

タイラント「・・・・良い人達だなー（ぽいぽーい）」

一方死柄木サイド

死柄木「なんだよこれ！オールマイトを殺してちゃちやつと帰るつもりがオールマイトが出てくる事すら無い！なんなんだ！」

菌華「まあまあ死柄木クン、そんな怒らないで、カルシウム足りてないんじゃないの？ほらにぼし。あつ、そうだ、タイラントー！13号先生連れて来てー！てか担いで来てー！」

タイラント「（シユタツ）お待たせしました。」

菌華「うん、全く待つてないけどな、で、13号先生、あそこに黒いカビみたいな居るじゃないですか、あれ物理攻撃無効なんで私たちだと手も足も出ないんです、吸い取ってくれません？出来ればその死柄木も行動不能にしたいんですが。」

13号「おまかせあれ（シユゴオオオオオオ！）」

死柄木「ぬうう！」

黒霧「死柄木弔！今日は引きましょう！」

死柄木「チツ！それしか無いか・・・・おいガキ、次はもつと手強いと思え。」

菌華「それはこっちのセリフだわさ。」

死柄木「（シユウウウン）」

菌華「行つたか。」

13号「骸牙君、だつたか。」

菌華「はい。」

13号「（ビシイー！）」

菌華「ぎやうん！」

13号「良くやつてくれた、だが、もう二度と1人でやる事の無い
ように。」

菌華「分かりました。」

13号「・・・分かつたなら良し！お腹空いたろう？学食奢るよ。」

菌華「本ですか⁈？めっちゃ空いてたんですよー！」

13号「食事の時に君の個性の事詳しく教えてくれないか？」

菌華「全然良いですよ！早く行きましょ！」

芦戸「菌華ちやーん！」

八百万「骸牙さん！」

轟「骸牙。」

菌華「めっちゃ来た！」

芦戸「すごいねー！あのヴィランの大群を2人だけで撃退するなん
て（もにもに）」

菌華「うん、褒めてくれるのは嬉しいんだけどほっぺをもにもにする
のは止めようか。」

八百万「タイラントさんもすごいですね！一回ここに飛んで来た時
は心配しましたがまさか一撃で倒しちゃうなんて！（さらさら）」

タイラント「司令官が私1人に力を回してくれたから出来た事で
す・・・ところで八百万様、なぜ私の髪をくしで解くのですか？」

轟「骸牙、その死体、どうするんだ？（パキパキ）」

菌華「ん？こいつは気絶してるだけよ、こいつの身体良い素材にな
りそうだつたから貰おうと思つてさ、ところで轟君、なんで私の足を
凍らせるのかな。」

一同「たつた2人だけで立ち向かつたからだよ！」

菌華「うえー勝てたからいーじやーん。」

芦戸「・・・・。（むにー。）

菌華「いだいいだい！ごめん！悪かつたから無言でほっぺ伸ばすの
やめよ⁈？ね⁈？いだだだだ！」

八百万「・・・・。（ギュツギュツ。）

タイラント「八百万様、なぜヘアゴムで髪を縛るのですか。」

轟「・・・・。（バキバキバキバキ）」

菌華 「轟君、無言で氷像を作ろうとするのは止めよ?」

相澤 「てかその怪人はこつちで預かるからお前には渡せないぞ?」

菌華 「せ、せめて腕一本だけでも!」

相澤 「肘から下までなら良し。」

菌華 「丸々一本下さいよ。」

相澤 「貰えるだけでもありがたいと思え。」

菌華 「はい。」

相澤 「・・・・・ そういえばお前ら。」

一同 「ん?」

相澤 「1週間後体育祭だ。」

一同 「・・・・・ はあああ!!?」

第3話 根に持つタイプにケンカを売るな 終わり

次回 何とかして新型ウイルスを作り出そう!

第4話 何とかして新型ウイルスを作り出そう！

夜0時山奥

菌華「今日は寄生虫をとにかく集めるぞ！」

タイラント「司令官、意味が分かりません、説明を求めます。」

菌華「ウイルスと寄生虫をまぜまぜして出来た虫を誰かに寄生させたらなんか起こる気がしたから即行動に移した。」

タイラント「・・・それは分かりました、でも夜に小さな虫を捕まえるのは困難ではありますか？」

菌華「気合。」

タイラント「脳筋も大概にして下さい。」

菌華「じゃあ虫の死骸を集めてくれ、出来ればカマキリを多めに。」

タイラント「何に使うのですか？」

菌華「帰宅後の実験見りや分かる。」

タイラント「・・・了解しました、ですが寄生虫集めは司令官一人でやつて下さいね？」

菌華「わーかつてるよ、じゃ、1時間後ここに集合な。」

タイラント「分かりました、ではこれより、虫の死骸集めを開始します、A隊は私と共に、B隊はそっち、C隊はあっちをお願いします。」

ゾンビ達「イエツサー！」

菌華サイド

菌華「ほーら猫ちゃんこっちおいでの、猫じやらし！猫じやらしであるよく、よくし良い子だ・・・今だ！（サツサツサツ）よし、予想通りノミがいっぱい取れた、もうこれだけで充分だな、猫ちゃんありがとね～。よし、私も死骸集めするか。」

タイラント&ゾンビA隊サイド

タイラント「セミ、セミ、カブトムシ、カブトムシ、カナブン、セミ、サソリ、セミ、セミ、スズメバチ、セミ、カマキリ、セミ、セミ、カマキリ、アゲハ、セミ、・・・セミが圧倒的に多い。」

ゾンビA「隊長！ムカデって虫でしたつけ!?」

ゾンビB 「バカお前ムカデは爬虫類だよ。」

タイラント 「どちらも違います、正確には両生類です。」

ゾンビA 「ありがとうございます！」

タイラント 「…カマキリ、セミ、サソリ、バツタ、カマキリ、ス

ズメバチ、アゲハ、セミ、カマキリ、サソリ、セミ。」

ゾンビB 隊サイド

ゾンビD 「おい、お前マムシって種族なにか分かるか？」

ゾンビE 「ムシって付いてんだから昆虫だろ。」

ゾンビF 「聞いた話だとマムシは爬虫類らしいぞ。」

ゾンビD 「でも爬虫類の虫つてムシだろ？なら良いんじゃね？」

ゾンビE 「それもそうだな。」

ゾンビF 「虫つて付いてんだから。」

ゾンビC 隊サイド

ゾンビG 「そつちあるか？」

ゾンビH 「ムカデなら。」

ゾンビI 「さつきすれ違ったA隊の情報だとムカデは両生類だそう

だ。」

ゾンビH 「両生類つてあれだろ？ゴリラとかだろ？」

ゾンビI 「いや、ゴリラは空を飛ぶ事から鳥類だと思う。」

ゾンビG 「マジか!? どうやって飛ぶんだよ！」

ゾンビI 「それはほら助走つけてジャンプ。」

ゾンビG 「それは飛ぶじやなくて跳ぶだよ。」

ゾンビI 「一緒じやねえか。」

ゾンビH 「で、このムカデどうする？」

ゾンビG 「虫っぽいし入れとけば？」

ゾンビH 「そうだな、入れとくか。」

1時間後

菌華 「終わったか〜？」

タイラント 「終わりました。」

一同 「イエッサー！」

無事下山

菌華「（ガチャ）ただいま、つて中に誰も居ないか。」
タイラント「虫の死骸ここに置いときますね。」

菌華「おうありがとうございます。よし、じや始めるか、とりあえずウイルスに猫ちゃんから採取した大量のノミを漬け込む。さて、後はひたすら新型の寄生生物が出来るのを祈るだけか。」

30分後

菌華「タイラントお前〇〇ツタ使いだつたのか。」

タイラント「ええ、上手く使えると2対1になりますからね。」

菌華「私ル〇ナから離れられないんだけど。」

タイラント「とか言いつつファ〇コも使つてるじゃないですか。」

菌華「速いキヤラ好きなんだよ（ボオン！）ファツ!!?何だ!!?」

ゾンビ「司令官！漬け込んでた奴が爆発しました！」

菌華「よつしゃ！多分成功や！じやお前そこのデカイ水槽に入れ！」

ゾンビ「え!?あたしですか!?」

菌華「そうだよはよしろ！」

ゾンビ「わ、分かりました！」

菌華「じゃ、この虫の死骸碎くの手伝ってくれタイラント！」

タイラント「分かりました。」

菌タイ「（ドシャー！グシャー！ベキ！ペキペキ！メシャメシャ！）」

菌華「なんでサソリが居るのが不思議だけどとりあえずよし！次はこの碎いた奴にさつき出来上がった虫を3匹ほど入れて私のウイルスと混ぜる！」

タイラント「はい。」

菌タイ「（ドバードバードバ、ぐーるぐーる）」

菌華「じゃあ最後にこの謎の液体を水槽に投入！」

タイラント「はい。」

菌タイ「（ダバーー）」

菌華「後は1時間放置。」

タイラント「次はどう時間を漬しますか？」

菌華「マ○カ8しようぜ。」

タイラント「世界対戦でお願いします。」

1時間後

???「（ザバツ！）ぶはあつ！」

起き上がった者は先ほどまでの姿の原形を留めてはいなかつた、細長い三本の指には鋭利な爪が付き全身に黒い甲殻を纏つてゐる、いかにも硬そうだ、身長もかなり高くなつてゐる、と言うより足が長い、そして1番特徴的なのはサソリの様な尻尾、先には針なんてちやちな者じやなく剣の様な物が付いてゐる、子供にも分かる様に言えばそう、昆虫人間だ。

???「あ、おはようございます。」

菌華「おう、起きたばつかで悪いがちょっと姿変えさせてもらうぜ、そのままでもカッコいいんだがな、私は美少女の方が好きなんだ。（みしみしみし）」

???「痛い痛い！司令官！痛いです！」

菌華「（みしみし、ボシュウ）出来たぞ、風呂貯めてあるから全身の液体流してきな、服も用意してあるから。」

???「は、あ、ありがとうございます。」

姿を2回連続で変えられたら戸惑いもあるだろう、1回目は昆虫人間に、2回目は少女に、見た目は黒い短髪に白い肌、そして真っ平らな胸、服を着ないとその位しか語る事が出来ない

菌華「そうギクシャクするなつて、お前さん今日から幹部だぜ幹部。」

???「じゃあ行つてきます。」

菌華「おう、行つてらつしやい。」

タイラント「・・・私、あの様なクリーチャーは見た事が無いんですけど。」

菌華「あいつとお前は感染してゐるウイルスが違うからな、てかあいつはウイルスじやなくてプラーガつて言う寄生生物だし。」

タイラント「名前は何と言ふのですか？」

菌華「『ヴエルデューゴ』濁点が多いのが特徴だ。」

タイラント「能力とかは?」

菌華「少女に変える前に尻尾やら爪やらトゲトゲしたもん付いてたら?あれを体の大体の所から出せるつづー能力にしといた、しかも体めっちゃ硬い。」

タイラント「弱点は無いのですか?」

液体窒素 氷結 ダメージ3倍 口ケラン ウツ頭が!

菌華「・・・氷結かな。」

タイラント「氷結、轟様とかでしようか。」

菌華「正確には凍らせて高威力の攻撃入れるのが効果的やな。」

タイラント「なるほど。」

菌華「んなもん知つてどーすんだ?」

タイラント「私が氷に耐性を付ければカバー出来るかなと。」

菌華「・・・新人思いの良い上司だな。」

タイラント「司令官の事もちやんと考えてますよ。」

菌華「ありがとな。」

ヴエルデューゴ「いや、良いお湯でした。」

菌華「そりや良かつた、服もちゃんと着れたみたいだな。」

ヴエルデューゴ「はい!これカツコいいですね!」

ヴエルデューゴの服

黒いローブ

迷彩服上下

黒のショートブーツ

潜入する気満々!

菌華「えーと、今3時半だから、めっちゃ急げば登校前にもう一人幹部が増えるな、よし!海行くぞお前ら!」

タイラント「了解しました。」

ヴエルデューゴ「イエッサー!」

菌華「テンション高くなガエルデューゴ、進化すると性格変わるん

か?」

ヴエルデューゴ「ん?ガエルデューゴって誰ですか?」

菌華「え?お前だぞ?」

ヴエルデユーゴ「ああ、幹部になると新しい名前が貰えるんでしたね！」

菌華「え？ そうなの？」

ヴエルデユーゴ「え？ 違うんですか？」

菌華「・・・さつさと行くぞ。」

移動中

タイラント「ところで何をするんですか？」

菌華「深海魚獲るぞ。」

タイラント「・・・もしかして。」

菌華「そう素潜り。」

タイラント「じゃあ私達はあそここの防波堤で朝ごはんのおかず釣つてますね。」

菌華「嘘嘘！ 地上！ 地上からだから！」

タイラント「でもどうやつて獲るんですか？」

菌華「まあ見ててみ（ぞるぞるぞるぞる、ギャリリリリ）」

ヴエルデユーゴ「あっ、それってあたしの尻尾じゃないですか？」

菌華「そうそう、これを限界まで伸ばして刺して獲る！ ヴエルデユーゴも能力に慣れたら出来るだろ。」

タイラント「それ魚がどこに居るかとか分かるんですか？」

菌華「・・・感？」

タイラント「あつちで釣つてますね。」

菌華「美味しいの釣つてよね。」

タイラント「お任せ下さい。」

ヴエルデユーゴ「あたしも司令官のそれ出来ないかな。」

菌華「てかタイラントなんで釣竿持ってきてんの？」

タイラント「食費を浮かす為です。」

菌華「秘書が優秀過ぎる。」

タイラントサイド

ヴエルデユーゴ「タイラント先輩！ 出来ましたよ司令官がやつてた

やつ！」

タイラント「それ元々あなたの能力ですよ？」

ヴエルデユーゴ「まだ慣れて無いんですよ。」

タイラント「まあ良いです、じゃあお魚獲っちゃつて下さい、あ、生態系破壊レベルで獲っちゃダメですよ?」

ヴエルデユーゴ「分かってますよ。」

タイラント「(キリキリキリキリ)おっと引いてますね、よいしょ!」

(ザパア)・・・これはイカですね。」

ヴエルデユーゴ「なんか、あたし達の仲間にこんな居ませんでした?」

タイラント「居るでしょうねえ、1人くらい。」

菌華サイド

菌華「1匹でも釣れたらオツケーなんだけどなあ、そう簡単に釣れないよn(ガブ!)」いつてえ!なんかに咬まれた!!?(ギヤリリリリリリ!ザパア!)ホオジロザメ!!?そりや痛いわ!鮫つて食べれるつけ!!?てか釣り上げられたんだからいい加減離せや!しつこいわ!いだだだだだ!このつ!(ブンツ!ヒュウウウウ、ザツパン!)::よし、死んではねえな、食わねえのに殺すのは気分悪いし良かつた、てか尻尾どうなつてる?・うえー歯が刺さつとるわ、ん?鮫?鮫?:鮫・・・」

タイラントサイド

ヴエルデユーゴ「先輩!またイカ獲れましたよ!」

タイラント「お刺身で頂きましょうか。」

ヴエルデユーゴ「良いですね!」

タイラント「それについてもイカが良く獲れますね。」

ヴエルデユーゴ「美味しいんでしょ?なら良いじゃないですか。」

タイラント「私は食べた事無いんですよね、イカゲーならやつた事あるんですけど。」

菌華サイド

菌華「ん?なんか触った様な:(ザク!)おっしゃー・ビンゴ!(ギヤリリリリリ!ザパア!)・・・あの宇宙人みたいなデザイン、多分深海魚だよな、うん、アレさえ採れれば正直深海魚じゃなくても良い、とかこいつ見えるかな。」

ヴエルデユーゴ「しれいかーん！こっちは終わりましたよー！」

菌華「タイミング良いなオイ、何釣れた？」

タイラント「美味しいのが。」

菌華「なら良し、帰るぞ。」

帰宅

菌華「じゃあ私は幹部もう1人作ってるから君らはご飯作つとい
て。」

タイラント「了解しました。」

ヴエルデユーゴ「あたし料理とか出来ないんですけど。」

菌華「なら私の隣で実験の様子でも見てなさい。」

ヴエルデユーゴ「はーい。」

タイラントサイド

タイラント「（スパツ、スパスパツ）これはバター焼き、これはお刺
身、これはイカ飯、他は冷凍で良いかな、あれ？バターつてまだ残つ
てたつけ？」

ゾンビ「マーガリンなら。」

タイラント「うおう！？・・・居たんですか。」

ゾンビ「タイラントさんも驚くんですね。」

タイラント「私を何だと思つてたんですか。」

ゾンビ「冷静沈着家事大得意いつも真顔で笑顔を見たら幸せになれ
ると噂の司令官秘書。」

タイラント「そんな噂が・・・。」

菌華サイド

ヴエルデユーゴ「司令官、それ何ですか？」

菌華「深海魚から運良く採れたジ・アビスつてウイルスの遺伝子だ
よ、これをt—ウイルスと混ぜてt—アビスつて新型のウイルスを作
れたら良いなあつて思つてる。」

ヴエルデユーゴ「作れる保証無いんですか！？」

菌華「とりあえずそれっぽい物を混ぜときや出来るだろ、現にお前
だつて適当に混ぜた物で進化したんだぞ。」

ヴエルデユーゴ「それはそうですけど。」

菌華「それよりそこの鮫の歯取ってくれ。」

ヴエルデューゴ「はい。」

菌華「さんきゅ。」

ヴエルデューゴ「鮫ベースですか？」

菌華「そうそう、こいつとお前とタイラント3人だけで結構な戦力になると思う。」

ヴエルデューゴ「誰に使うんですか？」

菌華「昨日からめつちや進化したがつてたあいつだよ。」

ヴエルデューゴ「ああ新型のウイルスに感染したがつてた。」

菌華「さて、下準備は終わつたし待つだけだ、その間何する？」

ヴエルデューゴ「ス○ラ○ウーンやりましょう！」

菌華「交互にやるか。」

第4話 何とかして新型ウイルスを作り出そう！終わり

次回 特訓に喰われる休日

第5話 特訓に喰われる休日

ヴエルデユゴ「先輩！せんぱーい！」

タイラント「何ですか騒がしい。」

ヴエルデユゴ「良いから来てください！司令官が大変なんです！」

タイラント「なつ！それを早く言いなさい！何があつたのですか！」

ヴエルデユゴ「見れば分かります！」

タイラント「司令官!?『ご無事で、すか。』

菌華「イヒーーー！ヌベヂヨンヌゾジヨンベルミッテイスモゲロンボヨー！『???』」

ヴエルデユゴ「スプ○でダ○ニーガチャ限界まで回したのに良いギアが1個も揃わなくて現実逃避なのかヌベスコで暴れ出したんです！」

タイラント「なんでダ○ニーガチャで良いの出ない→ヌベスコで暴れるになるんですか！」

ヴエルデユゴ「あたしが分かるわけないじゃないですか！」

ヌベスコ菌華「イヒーーー！ヌベベベベ！ヌベ！『???』」

タイラント「とりあえずその頭おかしいのを氣絶させて下さい！」

ヴエルデユゴ「気絶ってどうすれば良いんですか!?？首切り落とせば良いですか!?？」

タイラント「もう！私がやります！コホン、司令官?」

ヌベスコ菌華「ヌベ？」

タイラント「どりや！（ドムツ）」

ヌベスコ菌華「ガハツ（ドサツ）」

ヴエルデユゴ「・・・あわ、あわわわわ！タイラント先輩が司令官に腹パンを・・・。」

タイラント「司令官、お許し下さい。」

ヴエルデユゴ「つて先輩！あれ！司令官が作つてたウイルスがありえない色の光を放つてます！」

タイラント「今このタイミングで!? 司令官！起きて下さい！（ペチペチ）新型出来ましたよ多分！」

菌華「ん？ おお出来たか！」

タイラント「多分です。」

菌華「出来たか！」

ヴエルデユーゴ「多分です！」

菌華「被験者を召喚。」

ゾンビA「やつと出番ですか！」

菌華「オラとつととその水槽入れや。」

ゾンビA「入りました。」

菌華「（BGM キュー〇一3分クッキング）さて、とりあえず被験者にてアビスを大量に掛けます（ドバードバドバ）そしたら鮫の歯を5本、適当に被験者の体に突き刺します、そして脳無の肉片を水槽に2～3個浮かせます、終わり！」

一同「ええええええ!!?」

1時間後

???「（ザパツ）マジで進化出来たんだけど。」

起き上がりつた元ゾンビは一言で言うとゴツい、体色は黒と濃い紫で構成され右手が槍、左手が盾の様な形をしている、いかにも近接要員やで、と言う感じだ、こんなのに夜かち合つたら死を覚悟する、

菌華「疑つてたのかテメエ。まあ良いや、毎回恒例美少女になあれのコーナー！（みしみしみし）」

???「いだつ！ いだだ！ テメツ！ もうちよい優しく出来ねえのか!? ?」

菌華「んん？ 口が悪いなあ、こりや性格悪い方に傾いたかな？ 脳無の肉片使つたのが悪かつたんかな？（みしみしみしみしみし！）」

???「あだだだだ！ 悪かつた悪かつた！」

菌華「（ボシユウ）よろしい、じゃあ風呂入つてこい。」

???「何でだよ。」

菌華「お前全身ベツタベタだろうが、そんなんで歩き回られても困るんだよ。」

??? 「嫌だね。」

菌華 「強制連行するぞ？」

??? 「ハツ、出来るもんならしてみろよ。」

菌華 「言つたな？ よし、タイラント、ヴエルデューゴ、手伝つてくれ。」

タイラント 「了解しました。」

ヴエルデューゴ 「あいさー。」

??? 「ちよつ！ 待て！」

菌華 「ついでにヴエルデューゴ、一緒に入つて体洗つてやれ。」

ヴエルデューゴ 「おまかせあれ。」

??? 「やめろつ！ 離せ！ 離せよ！」

菌華 「いつせーのつせー（ポーイ、バツシヤアアアアン！）」

??? 「あああああ！」

あまりにも暴れるので浴槽に投げ込んだ

ヴエルデューゴ 「さあ隅々まで洗つてやる！ えーと？」

菌華 「『スカルミリオーネ』だ。」

ヴエルデューゴ 「長いからカルミでいつか！ ジャ、カルミ、あつた
かいのとつめたいのどつちが良い？」

スカルミリオーネ 「やめろおおおおお！ （バタン）」

タイラント 「・・・」

菌華 「能力とか諸々説明した方が良い？」

タイラント 「お願ひします。」

菌華 「えつと名前はさつきも言つたけどスカルミリオーネ、能力は
アホみたいにデカい槍と盾を召喚する能力。」

タイラント 「それだけですか？」

菌華 「あとは上半身か下半身どつちかが弾け飛んでも生きていられる異常な生命力かな。」

タイラント 「下半身だけ残つても意味無いんじや。」

菌華 「ダチョウみたいに走りながら電撃で攻撃してくんだよ。」

タイラント 「自己修復は出来るんですか？」

菌華 「出来ないなあ、でも私のウイルスを大量に摂取したら復活す

るよ。」

タイラント「なるほど。」

菌華「あ、これ関係無いんだけどさ、お前らの名前短くして良い?」
タイラント「5文字以内なら短縮しなくても良いのでは?」

菌華「・・・つまり改名すんな殺すぞって事?」

タイラント「まあそうですね。」

菌華「そこは否定して欲しかったな。」

タイラント「で、改名するんですよね?」

菌華「とりあえずヴエルデユーゴはヴエルかな。」

タイラント「あの新人は?」

菌華「カルミで良いだろ。」

タイラント「全員ラ行が入りますね。」

菌華「不思議だな。」

カルミ「(ガチャー) オイクソコマンダーハ!何だよこの服の色!」

菌華「クソコマンダーハ!?

ヴエル「あーカルミ、逃げちゃダメだよ。」

カルミ「テメエもテメエでカルミカルミうつせえな!」

菌華「何だろう、こんな感じの人がクラスメートに居た気がする。」

タイラント「居ましたねえ、こんな感じの人。」

カルミ「話を聞け!」

今更だけどカルミの特徴的な見た目

濃い紫髪

青目

渡した服

タイラントが着てる秘書服の紫バージョン

菌華「何だよ、かつこいいじやねえか。」

カルミ「いや服のデザインに文句は無えよ!?

菌華「無えのかよ。」

カルミ「だけどよ!普通黒だろ紫つて何だよ!」

タイラント「司令官、そろそろ支度をした方がよろしいのでは?」

菌華「そうだな。」

カルミ「てか俺の服の話はまだ

菌華「それか全裸かどつちが良い？」

カルミ「…………これで良い。」

菌華「良い子だ。じゃ、いつてきまーす（ガチャ）」

緑谷「あ、おはよう菌華ちゃん。」

菌華「おはよう緑谷君。」

緑谷「…………今日は学校休みだよ？」

菌華「私服だからまさかとは思つたけど聞きたくなかったなーその言葉。」

緑谷「ま、まあ丁度良いや、相澤先生が体育祭の事言うの忘れてたお詫びに学校のトレーニングルーム使わせてくれるんだって、一緒に行かない？」

菌華「太つ腹やね相澤センセ。でも丁度新しい幹部に能力の使い方を教えようと思つてたし。」

緑谷「どんな人達？」

菌華「平べつたく言うと昆虫人間と鮫人間かな。」

緑谷「・・・見た方が早そう。」

菌華「コノヤロウ。」

緑谷「じやあ先に行つてるね。」

菌華「ん、ちやちやつと着替えてすぐ行く。」

ちやちやつと着替えて雄英に到着

菌華「・・・忘れてた、雄英つてクソ広いんだつた。」

どこだよトレーニングルーム

相澤「おーい、骸牙。」

菌華「相澤先生。」

相澤「脳無の腕、役に立つたか？」

菌華「今の所性格が爆豪君に似ただけでした。」

相澤「何に使つたんだ・・・。」

菌華「新しい幹部に。」

相澤「・・・まあ良い、こつちだ。」

トレーニングルーム

切島「おつ、骸牙、お前も来たのか。」

菌華「銳児郎ちゃんか。」

切島「銳児郎ちゃんやめる！」

何でそんなに嫌がるんですかね

上鳴「まあまあ。ところで骸牙は筋トレか？それとも個性のコントロールか？」

菌華「新幹部の特訓。」

切島「お！また増えたのか！見せてくれよ！」

かなり興味ありげだ、まあ断る理由も無いしウイルスを操作して人型を形成する

ヴエル「（ぞるぞるぞる）司令官、あたしあやつの途中だつたんですが？」

カルミ「くだらん用ならぶつ飛ばすからなクソコマンダー。」

菌華「君ら一応私の部下だからね？」

泣きたくなつてきた

上鳴「おお～！可愛い！」

可愛い顔してるだろ？ラスボスの2・5倍の体力なんだぜ、そいつ、もう1人は滅多刺しにしてくるし

ヴエル「ん？司令官、友達？」

菌華「そうだ、濃いメンツだろ？」

カルミ「テメエが言えた事じやねえだろ。」

切島「・・・なんだろう、爆豪みたいな娘が・・・。」

気にしないで切島君

菌華「ほら自己紹介。」

ヴエル「初めてまして、あたしはヴエルデューゴ。」

カルミ「・・・スカルミリオーネだ。」

菌華「ああ、名前の事なんだけど君達2人の名前長いから改名させて貰うね、答えは聞かないけど。」

カルミ「はあ!?？」

ヴエル「あたしは賛成～。」

菌華「じあよろしくなヴエルとカルミ。」

カルミ「カルミ止めろ！」

上鳴「えーと、ヴエルちゃんとカルミちゃんと良いんだよね？」

菌華「うん。」

カルミ「良くねえ！」

菌華「じゃあカルミで良い人拳手、はい。」

上鳴「はい。」

切島「はい。」

ヴエル「はい。」

菌華「賛成多数でカルミに決定。」

カルミ「ちくしょおおお！」

ヴエル「で、司令官はなんであたし達を呼んだの？」

菌華「君らの能力をもつと使いこなせる様にアドバイスするのと戦闘能力の向上の為。」

ヴエル「なるほど。」

カルミ「めんどい。」

菌華「まあ強制的に連れて行くんだけど。ねえ上鳴君、広い所無いかな？」

上鳴「ん、ああ、あつちを右に曲がつてまっすぐ行けば実戦訓練用の広場があるぜ。」

菌華「さんきゅ。よしヴエル、カルミの両足持つてくれ、私は両手持つから。」

ヴエル「了解しました。」

カルミ「離せ！クソ！なんでいつも捕まるんだよ俺は！」

菌華「はいはい黙つて運ばれててね。」

実戦訓練用の広場

ヴエル「司令官！トレーニング内容はどうなつているのですか！」

広場に着いた瞬間、ヴエルが叫んだ、こいつほんとうるせえな、もうちょい声のトーン落とせや、あれか？材料に使つた虫の死骸にセミが多かつたからか？

菌華「帰るまでひたすら私と手合させだ。」

ヴエル「アツーお腹が痛くなつて來たなあ、これは今日食べたパン

がカビてたのかなあ、帰りたいなあ（棒）」

菌華「はつはつは、あれは昨日買つたばかりだぞ、それにウイルスで作られた生物兵器が食べ物で腹壊すとかあつてたまるか。」

ヴエル「クソツ！ 翻訳機が壊れた！」

菌華「斬新な聞こえないフリやめる。」

ヴエル「能力の使い方を教える訓練で能力を使わないと勝てなさそうな人と戦うとかおかしいじやないですか、ねえおかしいじやないですか（ガチトーン）」

菌華「ヴエルお前さ、釣りに行つた時尻尾使えたろ？ それと同じ要領で他の場所から他のトゲトゲを出しや良いんだよ、つか手加減もするし。」

ヴエル「おつしややつたろやないかい！」

菌華「うるせえ。」

カルミ「言つとくけど俺はやらない。」

菌華「体育祭で無事活躍してくれたら私が出来る範囲なら何でも言う事聞いてやる、何でも。」

ん？ 今何でもするつて言つたよね、と言われるのは嫌なので強調したい、どちらかと言うと言う方が好き

カルミ「・・・分かつた、やつてやる。」

菌華「よしじやあ行くぞ！」

ヴエル「待つて！ 司令官は1人だよね、誰か居た方がフェアじやない？」

訓練にフェアも何も無えよ。 でもまあ1人でやるより楽だから良い？」

いか

菌華「んーとじやあ、切島君！ きーりーしーまーくーん！」

切島「おう！ なんだ！？」

菌華「今からヴエル達と戦うんだけど2対1はフェアじやないって言うから良ければ手伝つて頂きたい！」

切島「いいぜ！ 今行く！」

移動するのがめんどいから大声で会話した

菌華「悪いね、練習相手にさせちゃつて。」

切島「別に良いぜ、よしやるか！」

菌華「じゃあ今度こそ！」

ヴエル「行きますよ、えい！（ギャリリリリリ！）」

ヴエルが私の脳天めがけて尻尾を伸ばして来た、ご丁寧に先っぽには刃も付けて、主人殺す気か？

菌華「おつと（サツ）」

ヴエル「にやつ！？」

避けられてびっくりしたのは分かる、割と馬鹿に出来ない速さで伸びて来たからな、でもな、にやつ！？は無いだろう

菌華「ヴエル、お前は不意打ち特化したり速き重視の方が良いと思うぞ、それか隠れたりな。」

隠れると言えば前世でバイオやつてた時どこにも入り口が見当たらない天井や排水路から攻撃して来た時は通り抜けフープでも持てるんじゃないかと思つた、結構身体が柔軟らしいけど入り口無いなら入るも何も無いと思う

ヴエル「隠れる場所が無いんですが？」

菌華「とりあえず出来そうな事をやるんだよ、体から出せる刃を枝分かれさせるとか。」

ヴエル「なるほど！」

菌華「じゃ、切島君、性格が爆豪君のカルミは私がやるからヴエル任せて良い？」

切島「おう！小細工は苦手だけど俺も少しはアドバイスしてやれりと思うぜ！」

やだ良い人

菌華「おつと始める前に一つ、ヴエル、私が許可するまで殺してしまう可能性がある攻撃は絶対禁止だ、今この瞬間から禁止、許可が出るまで使うな、お前が出す刃も先をあまり尖らせ切れ味も落とせ、尻尾の先の刃もだ、私が本気で來いと言つても殺さないレベル内での本気だ、良いな？」

これは本当に大事、クラスメートを間接的にも殺しちゃつたとか悔やんでも悔やみきれないレベル、せつかく転生したのに☆処刑END

☆とかシャレになんねえ、とりあえず死柄木君の息の根止めるまで死にたくない

ヴエル「分かりました！」

切島「よし！ 注意も終わつたし、ヴエルちゃん！」

ヴエル「ヴエルで良いよ。」

切島「じやあヴエル！俺の事は師匠と呼べ！」

ヴエル「はい師匠！」

切島「良い返事だ！」

うるさいのと暑苦sげふんげふん、熱血漢は気が合うみたいで良

かつた

切島「じやあかかつて来い！」

待つて切島君じやあの意味が分からない

ヴエル「はい師匠！（ダツ！）

ヴエルが切島君に向かつて走り出した、開戦でござんす

切島「近接で来るか！良いだろう！来い！（ガチガチガチガチ）

切島君が個性『硬化』を使って両腕をコーティングした、一方ヴエ

ルは丸腰で突撃している

切島「（能力は黒い刃？を身体から出せるとかか？だけど何も出してこねえな、体術だけで乗り切れる自信があるのか？でも戦闘に関してはまだ素人の様だし、つてもう目の前か！）

ヴエル「ふつ！（フオツ！）

ヴエルがかかと落としを切島君に入れようとするが切島君は硬化した腕でガードした

ガキン！

金属がぶつかる様な音が鳴った

切島「ツ！ そうだよな！ いきなり出す事くらい出来るよな！」

ヴエル「司令官に不意打ち特化しろと言われたので！」

どうやらヴエルは当てる寸前で刀を出した様だ、切島君はこう来ると思ってなかつたのか硬化を少し緩めてた様で割とダメージをもらつたみたいだ、一方ヴエルは宙返りをして切島君から少し離れる

切島「今度はこっちから行くぞ！（グオツ！）

切島君が硬化した腕でヴエルに殴りかかつた

ヴエル「むつ！（バキバキバキバキ）」

これは私も予想外、ヴエルデューゴ本来の黒い甲殻を腕に纏つた、
まだ教えてないのに

切島「何!?（タツ、ザザザザ）」

地面を蹴つて瞬時に距離を取る切島君

切島「・・・お前、弱点無いのか？」

ヴエル「本能的に冷たい物は避けてします！」

切島「どうしようもねえ！」

実を言うと昆虫の甲殻だから切島君の硬化の方が硬いんだよね

切島「・・・いや！考えるのはやめた！俺の得意技はゴリ押しだ！」

（ダツ！）

そう言うと切島君はヴエルにタックルを仕掛けた

ヴエル「（ドゴツ！）ぎやつ！」

切島「まだまだあ！（ザザザザザザザ！）」

タックルを当てもなお、牛の様に突き進む切島君、ゴリ押しを象徴するかの様な攻撃方法ですな、切島君マジ切島君

ヴエル「のおおおおお！ストーップ！（ギャリリリリリ！ヒユツ！）」

切島「（バシイ！）がつ！（ゴロゴロゴロゴロ）」

尻尾で切島君を弾き飛ばすヴエル

切島「（むくり）まだだ！（ダツ！）」

ヴエル「ですよね！（ジヤツ！）」

ヴエルが手の甲、肘、膝、かかとから刃を出し走つてくる切島君を迎撃しようとする

切島「フン！（グオツ！）

ヴエル「りやあ！（ガギイン！）」

硬化した拳と手の甲の刃がぶつかる

切島「（ギギギギギ）はつ！（ガツ！）」

ヴエル「なつ！？」

ヴエルの刃を腕ごと払いのけた切島君がまたタックルの体制に入
る、なんか某鎧の巨人を思い出すよ

切島「オラオラオラオラアー！（ドドドドドドドド＝？）」

切島君が某星の白銀先輩の様な掛け声と共に2回目のタツクルを繰り出した

ヴエル「ぎやーー！師匠怖ええええ＝？（ドドドドドドドド＝？）」

ヴエルはもちろん逃げる

ヴエル「（ガツ）あつ（ゴツ！ガツ！ドツ！ゴロゴロゴロ！）あああああ！」

ベタに足を引っ掛け多少リズムを刻みながら転がり回るヴエル、なんかもうお悔やみ申し上げますとしか言えない

切島「お、おーい、大丈夫か？」

流石に心配する切島君イケメン、はつきりわかんだね

ヴエル「司令官！あたしもう帰つてタイラント先輩が作つてくれたフレンチトースト食べてイカやつて寝たいです！本気は明日から出します！」

菌華「二ート思考止めろ！これ終わつたらおやつ買ってやるから！」

ヴエル「今本気出します！」

随分と即物的だな

菌華「どうでも良いけどうつ伏せのまま叫ぶのシユールだからやめてくんね!?」

ヴエル「（むくり）良し！行きますよ師匠！」

切島「おお！来い！」

ヴエル「（ジャツ！）やつ！（ヒュヒュヒュヒュヒュヒュ！）」

ヴエルが切島君の周りを高速で旋回する、どうやら走つているのではなく地面を思いつきり蹴つて水平にジャンプしてる様だ、かつて（語彙力の消失）

ヴエル「はつ！（ドツ！ギャキイン！）」

一際強く地面を蹴ると手の甲に生えた刃で切島君を斬りつけた

切島「やるな！」

ヴエル「どうも！（ドツ！キン！キキキキキン！）」

ヴエルが少しピッチを上げ切島君を連続で攻撃する、まづくのうち

！まつぐのうち！

切島 「（）のまま行けば先に倒れるのは俺、どうする！？···
いや、違う、俺の得意技は、ゴリ押しのはずだろ！・考えるな。」

ヴエル 「（？何もして来ない？まあ良い、このまま体力を削り切つて
終わり！）やつ！（ドツ！）」

切島 「そこだ！（ガシイ！）」
ヴエル 「ファツ！？」

切島君が飛んで来たヴエルに飛び掛かり捕まえた、うそだろ銳児郎
！オイオイトイ、死ぬわアイツ（ヴエル）

切島 「（ゴロゴロゴロ）マウントポジション取つたぞ、降参するか？
(ガチガチガチガチ)」

ヴエル 「···降参で。」

切島 「よっしゃあ！あー、キツかつたー。なあ骸牙、こいつ本当に
戦い初めてなのか？」

菌華 「正真正銘初陣ですが？」

切島 「なんでこんな強いんだよ。」

菌華 「うーん、種族自体が戦闘民族だから？」

切島 「何だよそれ···。」

実はカルミも召喚してるから100%じゃないんだよなあ

ヴエル 「結局刃の枝分かれやらなかつたなく、甲殻の防御もまだ使
いこなせてないし···。」

切島 「俺の個性と少し似てるしコツとか教えてやろうか？」
ヴエル 「お願ひします！」

切島 「てか骸牙、お前ら俺らの戦い見てて戦つてねえだろ。」

菌華 「···バレた？」

切島 「2対2とは何だったのか。」

菌華 「今からやるから許して。」

カルミ 「はあーめんど。」

菌華 「ほらやるぞ。」

カルミ 「何やりやいんだよ。」

菌華 「とりあえず、お前自分の能力分かつてるか？」

カルミ「・・・・・」

菌華「能力のもつと上手く使える様にする為のトレーニングなのに自分の能力を分かつてないとか本末転倒なんだが?」

カルミ「今日の朝進化したんだから知ってるわけ無いし、それに元々俺はやるとは言つてないんだが?」

菌華「フカヒレスープにすんぞ鮫。」

カルミ「悪かったよ、で?どんな能力何だよ。」

菌華「アホみたいにデカい槍と盾を召喚出来るのと上半身か下半身どちらか弾け飛んでも生きてられる生命力かな。」

カルミ「お前本当説明大雑把な。」

菌華「I want to kill you.」

カルミ「そんなに怒るとは思つてなかつたよ。」

菌華「そんな事よりお前槍か盾出せるか?」

カルミ「具体的にどうすりや良いんだよ。」

菌華「槍出るつてイメージしろ。」

カルミ「チエーンソーとか出ねえかな。」

菌華「それはお前の武器ちやう。」

カルミ「じやあ誰の武器なんだよ。」

菌華「チエーンソー・マジニ先輩の。」

カルミ「マジニ?」

菌華「お前の部隊じやねえから知らなくとも問題無いぞ。」

カルミ「待て部隊つて何だ。」

菌華「T—ウイルス隊、プラーガ隊、T—アビス隊、マジニ隊、ウロボロス隊、C—ウイルス隊、統一しといた方が色々と楽だと思つてさ。」

カルミ「ちなみに俺はどこ所属なんだ?」

菌華「T—アビス隊副隊長。」

カルミ「隊長は?」

菌華「スキヤグデツドさん。」

カルミ「今どこに?」

菌華「今はT—アビス隊お前以外居ないぞ。」

カルミ「今の所どの隊を強化するつもりなんだ?」

菌華「プラーク隊かな、アルマデューラかつこいいし簡単に作れ
そうだし。」

カルミ「そんな事より訓練の続きをよ。」

菌華「お前がこの話振つて来たから始まつてすらいねえんだよ。」

カルミ「反応したお前が悪い。」

菌華「一回本当に殺したろかなコイツ。」

カルミ「やつてみろや。」

菌華「時間勿体無いから訓練始めるぞカス。」

カルミ「カスつて言つた!?何この人!?!?」

菌華「じゃあ右手に思いつきり力入れる。」

カルミ「イメージじやなかつたのかよ。」

菌華「あんなんデマに決まつとろうが。」

カルミ「何でデマ教えた?」

菌華「まあそんな事より力入れる。」

カルミ「ハツ!（みしみしみしみし）ツ!これ結構キツイな・・・。」

菌華「もうちよいもうちよい!カルミの!ちょっと良いとこ見て

みたい!フウーーー→（パンパンパン!）

煽つてる雰囲気を出しながら手を叩く私

カルミ「やめてめっちゃ集中出来ない（みしみしみし）」

菌華「でもほらもうすぐもうすぐ!」

カルミ「（バシュウン!）・・・出来たけど、これが俺の武器か?」

菌華「そうだ、身の丈に合つてないだろ?」

その槍はU.S.Jで遭遇した脳無がやつと持てそうな大きさで、もは
や槍と言うより大剣の側面に棘を生やしただけにしか見えない、その

上これと同じくらいの大きさの盾と同時に使うなどとてもじやない
が目の前の女性が出来るとは誰も思えないだろう

カルミ「ああそだ、盾盾（みしみしみしみし、バシュウン!）うわ、

これまで禍々しいのが。」

菌華「最悪それで殴打すりや良いもんな。」

カルミ「じゃ、行くで（ドツ!）」

菌華「は？え？ちよ待つ（ベギ！）」

結論から言う、カルミがいきなり近寄つて来て盾で思いつきり殴られて吹つ飛んでる、凄い痛い、よぼよぼのおじいさんのパンチ100発分くらい痛い、マジかよこれ主人の顔丸潰れだよ。いや、私は司令官だから、戦闘はしないから

菌華「もうあいつ訓練しなくて良いな、まず私がやりたくない、このまま体育祭出しても大丈夫やろ。てかまだ飛んでんのか、あいつどんだけ力込めて殴ったんだよ、私なんか恨まれる様な事したつけ？」

（ヒュウウウウ）

第5話 特訓に喰われる休日 終わり

次回 体育祭ナウ！荒らすぜ～！止めてみな！

第6話 体育祭ナウ！荒らすぜ！止めてみな！

雄英高校 1—A組教室

視点 菌華

少し長めの休日（全て特訓だけに使った）が終わり、いよいよ体育祭が明日に控えた。お日様も気持ち良いしもういつそこのまま寝てしまおうかと思つてうとうとしていたら

麗日「菌華ちゃん！ちよつと起きて！」

麗日ちゃんが驚いた様な声で起こってきた。何ですか急に、私は今テンション低いんですよ。私がいつもあんな頭のおかしなテンションだと思わないで下さい

菌華「どうかしました？麗日ちゃん。」

麗日「菌華ちゃん！いやコレ・・・。」

私が目をこすりながら見た教室のドアの外には

他のクラスの人A「あの子だ！たつた1人でヴィランを追っ払つたつて子！」

他のクラスの人B「本當だ、・・・しかし眠そうだな・・・。」

凄い数の人が居る、心なしか私に視線が集中してゐる氣もする

菌華「・・・えー、あー、寝ていい？」

麗日「えつ！待つて待つて！ちよつとで良いからヴィランと戦つた時の話を聞かせてって言つてるの！あのままだとうちら教室から出られんし!!？」

菌華「・・・眠い。」

他のクラスの人A「お願ひ！ちよつとで良いから！」

いつのまにか目の前に居た人も、両手を合わせて頼んでくる

菌華「・・・えーとじやあ、何が聞きたい？」

他のクラスの人B「怖くなかったの？」

菌華「全く。」

でも、あのファッショングループで出来る死柄木のメンタルは割と怖かつた

他のクラスの人B 「何で？」

菌華 「とりあえずこいつ蹴り倒すつて思考しか無かつた。」
今でも許してない、あいつが捕まるまで許さない

他のクラスの人A 「そのヴィランになんか恨みでもあつたの？」

菌華 「・・・U.S.J.の数日前、右腕もがれた。」

一同 「・・・・はああああ!!?」

驚かれた。えつ？ 腕もがれたなら普通恨まない？

他のクラスの人A 「えつ、でも、あるじやん、腕。」

1人が私の右腕を指差す

菌華 「治したからね。」

他のクラスの人B 「へえ、どーゆう個性なの？」

菌華 「体育祭明日なんだから情報漏洩はしませんよ。」

他のクラスの人達 「チツ。」

そんな露骨な舌打ちじゃ私はビクともしないよ諸君！ そんなので
怯んでたら私バイオなんて出来ないし！

??? 「なるほど、流石に教えてはくれないか。」

人の波をすり抜けてきた男の子が、私の言葉に相槌をうつた

菌華 「確か・・・心操人使君だよね。」

心操 「へえ、普通科の俺を覚えてくれてるのか。」

菌華 「ハハハハハ、いや人の名前を覚えるのに普通科も何も無いで
しょ君。」

心操 「・・・大方一人でヴィランを追つ払つて調子乗つてると思つ
てたんだがな。」

失礼な！ 私はあんなので調子乗るほどバカじやないわ！ ・・・

多分 菌華 「いや心操君が単純に強そうだから警戒してただけなんだけど
ね。」

心操 「それは世辞か？ なら止めてくれ、気分が悪い。」

このボーリマジで失礼だなオイマジで！ まあ、気にしないけどね！

菌華「お世辞じや無いよ、直感で何となく。」

心操「・・・分かつた、悪かつたな。」

ここで素直に謝る所を見ると、良い人かな？普通科とかヒーロー科とか言うワード出して来る辺り、多分ヒーロー科に入りたかったんだろうなあ。思えば私、神様がお膳立てしてくれたから入れたんだよな。・・・うーむ、少なからず罪悪感が・・・

菌華「別に良いよ気にしてないし、そもそもそんくらいの言葉でダメージ受けるほど私のメンタルは豆腐製じゃない。」

心操「具体的に何をされたら傷付くんだ？」

菌華「野良猫に威嚇されたら碎け散る。」

心操「・・・・・フツ。」

菌華「（ガタツ！）今笑つたなお主！」

思わず席を立つ

心操「気の所為だ。」

菌華「いや笑つたろ！」

心操「・・・・・猫に触る時は姿勢を低く下から手で触る良い。」

何気にアドバイスをくれる心操君、やはり良い人

菌華「私いつもそれなんだけど！？？」

心操「それはおかしくないか？」

私もそう思う

菌華「うーん、やつぱり人外は動物に嫌われるんかな。」

心操「人外？」

おつと口が滑った、話題を変えよう

菌華「そんな事より心操君。」

心操「何だ？」

菌華「君、猫好きだよね？」

心操「・・・・・。」

だんまり

菌華「いや猫好きだよね？」

心操「・・・・・。」

だんまり

菌華「猫、好きだよね?」

心操「・・・。」

菌華「だんまり!」

口に出てしまふた

心操「黙秘権と言う物があつてだな。」

菌華「言いたくないわけね。」

絶対猫好き、絶対、言い切れる、心操君は絶対に確実に100%是非でも猫好き

心操「そう言う事だ。邪魔したな。」

菌華「また明日ね♪(ふりふり)」

心操君に手を振つて、自分も帰る準備を始めた

他のクラスの人A「あつ!待つて!もうちよい!」

菌華「えー、さつきもちよつとつて言つてたじやん、私は帰つてペツトの世話をしても飯食べて明日に備えて寝たいんだよー、じゃ、また明日。」

そう言つて私は開け放しのドアから教室を後にした

麗日「菌華ちゃんのペット。何飼つてるんだろ?ムカデとかかな？」

？」

菌華サイド

菌華「ただいま。」

タイラント「お帰りなs

ヴエル「お帰り司令官!」

カルミ「はよ飯食つてスマ○ラやるぞ。」

三者三様の出迎え方だ。最後のは出迎えと呼んで良いのか微妙だが

が

菌華「明日体育祭だから遅くまでは無理な。」

タイラント「そういうえば司令官、体育祭にらあの子達も連れて行きますか?」

菌華「もちろん、負けたくないし」

よーしお姉さん頑張つちやうぞー!」

タイラント「全く、血氣盛んですね。まあ私も最近家事ばかりだつ

たので運動不足解消に丁度良いですが。」

ヴエル「あたしも戦いたいよ司令官！その為の訓練でしょ？」

カルミ「俺もヴエルに賛成だ、まあ俺はほぼ訓練してないがな。」

どうやらかなり戦いに飢えてる様だ。だが待てタイラント、多分お前はちよつと運動しないくらいじや戦闘力は落ちへんぞ

菌華「まあ、士気とやる気は充分みたいだな。じゃあ明日の体育祭！どんな競技でも勝ち抜いてやるぞ！」

一同「おーーーー！」

翌日 雄英高校 体育祭会場 1—A組 控え室

視点 菌華→緑谷

今日は待ちに待つた体育祭、僕たちの戦いが全国に放送されるとなるとかなり緊張する。・・・でもそんな僕の心境とは裏腹に、全く緊張していない人が1人

菌華「体育祭だあああ !! ?」

切島「おおおおおおおお !! ?」

上鳴「ワアアアアアアアア !! ?」

菌華ちゃん、君はもう少し緊張感と言う言葉を覚えた方が良いよ・・・、あとうるさい

蛙吹「テンション高いわね、ケロケロ。」

菌華「ほらほらだから前にも2回言つたけどテンションに合わせた言動を取らないと死ぬんだよ私つてば（シャン！シャン！）」

どこから出したのか、タンバリンを狂った様に叩く菌華ちゃん

蛙吹「そんな簡単に死ぬのだつたらゾンビの回復能力の意味を感じないわ。」

菌華「ヒューー！言葉のナイフが突き刺さるねえ !! ?こいつあ痛い！」

どこのボイスヒーローの様な口調で「たつはー」と顔を抑える菌

華ちゃん

芦戸「……菌華ちゃんって、なんて言うか、プレゼントマイクに似てるよね。テンションといい喋り方と声量といい。」

声量がマイクに似てたら僕たちは死んでいるのでは……

蛙吹「確かに似てるわね、ケロ。」

麗日「それに男子と女子の間みたいな喋り方だよね。」

上鳴「一人称は私だけど俺とか切島とかと普通に話すし爆豪と言悪いしてるし……お前本当に女子か？」

確かにかつちちゃんと口喧嘩出来るのは凄いと思う、それも女子が。

菌華「なんなら証拠品としてブラを提出しようか？」

峰田「その胸でブラ着けれんのか？」

菌華「おっしゃ峰田くんちょっとおはなししようよ☆（ガツ）」

峰田「ヤメロオオオオオ!!?（みしみしみし）ギャアアアアアアアアアアア！」

峰田君がアイアンクロールで持ち上げられ、彼と彼の顔の皮膚が悲鳴を上げる。今のは自業自得としか言えない

轟「そろそろ選手入場だぞ。」

菌華「あ、はい。」

轟君の鶴の一聲で菌華ちゃんが大人しくなった

雄英高校 体育祭スタジアム

マイク「雄英体育祭!!?ヒーローの卵たちが我こそはとシノギを削る年に一度の大バトル!!?どうせてめーらアレだろこいつらだろ!!?ヴィランの襲撃を受けたにも拘わらず鋼の精神で乗り越えた奇跡の新星!!?ヒーロー科!!?1年!!?A組だろおお!!?」

観客「ワアアアアアア!!?」

緑谷「わあああ・・・人がすんごい・・・・・。」

僕たちに視線が集中している。実質ヴィランを追つ払ったの菌華ちゃん1人なんだけどね・・・、あとタイラントさん

飯田「大人数に見られる中で最大のパフォーマンスを発揮できるか・・・、これもまたヒーローとしての素養を身につける一環なんだ

な。」

菌華「ああそーゆう。」

菌華ちゃんはまだ緊張してない様だ、声でもう分かる、

ミツドナイト「選手宣誓!!?」（ピシャン！）

18禁ヒーローミツドナイトが鞭を鳴らしながら言う

観客A「おお！今年の主審は18禁ヒーローミツドナイトか！」

観客B「校長は？」

観客A「校長は例年3年ステージだよ。」

常闇「18禁なのに高校に居ても良いものか。」

菌華「高校の先生にしてはバカみたいに際どいよね。」

峰田「良い。」

本当に良いのだろうか・・・

ミツドナイト「静かにしなさい!!?選手代表!!?1→A爆豪勝己

！」

なつ!!?

緑谷「えー！かつちやんなの!!?」

切島「アソツ多分他のクラス敵に回す様な事言うぞ。なあ骸牙。」

菌華「それはそれで面白い事になりそうじゃない？」

緑谷「面白い事で済んだら良いけどね・・・。」

そんな事を話してゐる間にかつちやんが壇上に上がつてゐた、そして
深呼吸し、一言

爆豪「せんせー。」

一同「ゴクリ・・・。」

爆豪「俺が1位になる。」

切島「絶対やると思つた!!?」

はあ、予想通りだ。流石かつちやん、褒めてないけど

他のクラスの方A「調子のんなよA組オラア！」

飯田「何故品位を貶めるような事をするんだ！」

他のクラスの方B「ヘドロヤロー!!?」

他のクラスの人達からのブーイングもハンパンないけど飯田君から
も若干それっぽい物を受けてゐる

爆豪「せめて跳ねの良い踏み台になってくれ。」

指で死ねのポーズをした後、かつちゃんは壇上から下りた、良くやるなあ・・・

他のクラスの方C「どんだけ自信過剰だよ！俺が潰したるわ!!?」
・・・自信、違う・・・以前のかつちゃんならああいうのは笑つて言う・・・自分を追い込んでるんだ。ぼくらを巻き込んでるのがかつちゃんっぽいけど・・・

菌華「ほれ見ろ切島君、面白い事になつたやろ、流石我らの爆豪君。」
アレを面白い事で済ませる菌華ちゃんが恐ろしくなつて来た、つくづくどんな神経してんんだろうと思う

ミッドナイト「さーて、それじゃあ早速第一種目、行きましょう！」

麗日「雄英つてなんでも早速だね。」

菌華「せつかちさんなんだろ。」

ほんと緊張感無い！

ミッドナイト「いわゆる予選よ！毎年ここで多くの者が涙を飲むわ！さて運命の第一種目種目！今年は・・・・・。」

みんな（菌華ちゃん除く）の緊張が高まる、そしてホログラムの画面に映し出された文字は・・・

ミッドナイト「コレ！」

障害物競走

緑谷「障害物競走・・・・。」

ミッドナイト「計11クラスでの総当たりレースよ！コースはこのスタジアムの外周約4km!!？我が校は自由さが売り文句！ウフフフ・・・コースさえ守れば何をしたつて構わないわ！」

ミッドナイトがルール説明を終えたのがスタートゲートを指差し

ミッドナイト「さあさあ位置につきまくりなさい。」

ミッドナイトがそう言うとスタートゲートの上に付いているランプが1つ点いた

観客の人達が早く早くと急かす様に見てくる、そして2つ目のランプが点いた、あと1つでスタートだ・・・

轟「クソ親父、見ていやがれ、俺はここでお前を完全に否定する」

爆豪「（デクも半分野郎もクソゾンビも、全部俺が叩き潰して完膚なきまでの1位を手に入れる！）」

菌華「（・・・お腹空いた）」

それぞれの思いが混ざり合い、最後のランプが点いた
ミッドナイト「スターーネート!!？」
始まった!!?

第6話 体育祭ナウ！荒らすぜ～！止めてみな！終わり
次回 私つてば障害物競走に向いてないと心底思う

第7話 私つてば障害物競走に向いてないと心底思う

「スタ————ト!!」

開いたゲートの上部に点灯していた緑色のランプが全て消えると同時に、ミッドナイトが合図を出した事で11クラスの全員が狭いゲートへと突入した。

「さて、やつてやる——ぞおおおおおおッ!! ちよつ……待ておいつ!! 始まつたばつかなのに人の波に流されボボボボボッ!!」

しかしゲートはその11クラス全員がお世辞にもスムーズに通れるような広さは無く、そうして出来上がるのは数秒前まであくびをしそうなほど呑気な顔で「……お腹空いた」などと考えていた阿保すら二重の意味で目が醒める激しい人の濁流だつた。

「ふつはつ!! いや待つて足が地面に付いてる感覚無いんだけどつ!? 淀い浮遊感あるつ!!」

菌華はバタバタと半パニック状態で手足を動かすも踏み慣れている確かな大地の感触は無く、空を蹴ることに終始。しかし周りがほぼ浮いている彼女を挟みながら前に進むので自身の足で進む手間は省けている様だつた。

そうして波に流されていると、前方から菌華の耳に「何だ凍つた!!」や「寒みー!!」など、4月には聞きそうにない季節外れな言葉が聞こえてきた。

それに対しても首を傾げていると、急に肌寒くなつてきて菌華も思わず肩を抱える。更にはゲートの出口から周辺、そして少しゲート内の壁まで氷がへばり付いているのを目撃して彼女は叫んだ。

「寒うつ!! 本当に凍つてるし?! いつ、今4月だよね!? まさかこれが障害物……ってあ、さてはあの赤白イケメンの仕業だな?」

ひらけた場所に出た事で挟んでいた人達がいなくなり、やつと地を踏めると思っていたのに、凍結しているおかげでバランスとりながら

おつかなびつくり前へ滑るのが精一杯な状況になつていた。

転ばないように細心の注意を払いながらつるつると進んでいると、足が地面ごと凍つて見事に立ち止まつている人達を発見し、通りすがりに御愁傷様ですと心の中で合掌しながらあの氷について菌華は推理を始める。

まずはこの競争の目玉である障害物の線も考えたがゲートから出て即戻は流石に違うと思い、可能性から外す。その流石も雄英なら平気でやりかねないが話せば切りがなくなるのでやめておいた。

そして二つ目にして最後の可能性はクラスメイトである轟焦凍の個性によるもの。というか今のところそれしか彼女の思考の中に無いので、菌華はこれを轟の仕業と思うことにした。

「いやあ……人の波で溺れたお陰で私は後ろに留まつてたから氷結に足を取られなかつたつてわけか……。てか何してもいいとは言つてもこんな事するかなふつー。この世界のイケメンは容赦が無いのか……」

もみくちやにされてようやく目が覚めたかと思えば、この期に及んでもだふざけた事を呴きながら滑つている菌華。

そんな彼女に同じように滑りながら話しかける者がいた。

「わっ、ととつ！あつ……き、菌華ちゃんつ！」

「うわつと……！おつ、緑谷くんつ。1人？」

「あ、いや——」

「よオ骸牙！オイラもいるぜ！」

「……峰田くんもか……」

菌華に話しかけたのは、地味な雰囲気なのに緑髪とかいうトンデモない色のヘアーをしているけど超が10個付くほど良い人、と菌華に勝手に評価されている緑谷出久。そして彼と共にいたのが、なぜこいつが除籍にならないのかと何度も菌華を悩ませたセクハラグレープこと峰田実だった。

緑谷の時は仲のいい知り合いを見つけてぱつ、と笑顔になつたのだが、峰田を視認した瞬間にテンションが露骨に下がっている。

「あつ骸牙今スッゲーテンション下がつたな!!」

「ウン……まあ……」

「チクショーア否定しねえしよオ!!緑谷つ!!何でお前だけっ!!!」

「えつ……ええ~……!!それは僕に言われても困るよ峰田くん……

!!!」

日頃の行いで既に差が付いている事実を気付いてないのか認めたくないのか、自分の登場をあからさまに良く思っていない菌華を見て半狂乱と呼ぶに相応しい様子で叫びながら緑谷に八つ当たりする峰田。それに対しても緑谷はなんともやりづらそうに返事をする。

どうとう峰田は自身の個性である毛髪をもぎ取り、両手に持つところ叫んだ。

「もういい!!オイラはあの先頭のイケメン追い越して一位になつてやるんだからなあ~ツ!!!」

その髪を凍り付いた前方の地面に投げつけると、峰田はそれらをトランポリンがわりに跳ねながら轟に立ち向かっていった。

「……何だつけああいうの。無謀つて奴だつけ?冷凍グレープ出来上がつてない事祈つとこうよ」「祈らなくとも大丈夫だよ!!……多分」

緑谷にすら多分と言われるほどの轟と峰田の力の差。同じクラスという事もあってそれを知っている彼らからすれば無謀と言われても仕方ない。

そんなことを話していると噂をすればと言えばいいのか2人の背中が見えてくる。

「くらえ、オイラの必殺……G R A P E——」

それは丁度峰田が飛びながら轟に向かつて毛髪を投げようとしている時だつた。しつかり構え、技の名前を叫ばんと腕を振りかぶろうとしたその時。

W H A M!!そんな擬音と共に鋼鉄の腕が空中で回避行動に移れなり峰田にクリーンヒットした。

側転の様に回りながら勢いを付けて面白いくらい転がつていく峰田。女子の日頃の恨みが放たれたのかもしない。

「峰田くん!!」

『ターゲット……大量！』

「入試の仮装 敵……！」

雄英を受ける際に相対したロボット。通称仮装 敵による赤いレンズを光らせての登場に少なからず驚く緑谷。

そんな緑谷以外にも訳がわからないと言った様子の生徒達は多く、彼らのために実況であるプレゼント・マイクから解説が入ってきた。『ツさあ、いきなり障害物だ!! まずは手始め……第一関門！ ロボ・インフェルノオ!!』

これこそ雄英のお得意である受難や壁という物なのだろうが、今実際に壁の様に並べられているでかいロボット共を最初の関門に配置するのは流石にどうなのだろうか。クリアチエックのされていない or した奴が上手すぎるパターンである。

当然こんな前の前にすれば口からとりあえず Pulls ultra の前に愚痴だつて漏れる。

「入試ん時の〇P 敵じやねえか!!!」

「マジか！ ヒーロー科あんなんと戦ったの!?」「多すぎて通れねえ!!」

「いッやいやいやナイナイナイ……こなん障害物でも手始めでも第一関門でもないよ!! ただのロボインフェルノだよ!!」

この状況、ヒーロー科もそれ以外の科もパニックにならないのはむしろ少数だ。逃げる気なんて全員誰にもさらさらないがその上慌てるなどいうのは少し酷である。

そして少数の中でも更に頭がクールで手段も持っている者は当然、パニクる他を置いて行く。

それを実践する様に今もなお先頭にいる轟がしゃがみ込んでヒタリと地面に触れると、彼の周りを強力な冷気が渦巻いて立っている地面すら氷結させていった。

そんなあからさまに何かをする前の構えを取つて轟にもプログラムが残念なのか、巨大な鉄塊は躊躇など微塵も感じられない様子で襲い掛かっていく。

「おいおいあれ大丈夫……!? 潰されたりしな……い……よね……」

それに対しても構えたまま大きなアクションを起こさない轟に菌華は少なからず不安を覚えると、少し慌てた様子で彼の元へ向かおうとする。

が、しかし。菌華が口にしていた言葉を言い切る前に轟が手を振り上げ、荒ぶるロボットを一瞬で凍結させた。

「……は、え……？」

脅威がそのまま動き出したかのようなあれを即冷凍し、余裕で突破していく轟に菌華は開いた口が塞がらない。

そんな後続を置いて轟は凍らせたロボの隙間から先へ進んでいった。

「あいつが止めたぞ!!あの隙間だ！通れる！」

そんな時1人の生徒が凍結したロボの隙間を指差して叫んだ。その言葉に皆も隙間を注目し、中でも勢いのある男子生徒2名は後先考えずにそこへ向けて走り出していた。

「やめとけ、不安定な体勢ん時に凍らしたから…………倒れるぞ」
「うッ…………おおおおおおおっ…………!!」

確かになんでもありとは聞いた。妨害だつてなんだつて、普通の体育祭じやないことは菌華も重々承知していた。

……だがこれは無いだろう。おかしいだろう。あんなのが重力に従つて倒れて来たら人なんて簡単に死ぬだろう。そんな考えが頭の中を駆け巡り、まともなコメントの一つも出ない。

実況が何か言っているのが聞こえなくも無いが、驚きとロボが倒れた際の轟音で聞き取れなかつた。

「お、おい！誰か下敷きになつたぞ!!」

「死んだんじやねえか！死ぬのかこの体育祭!!？」

そうだ。そういえば生徒が2人、隙間に猛進して行つて見事にロボと地面に挟まれてたんだつた。しかもそのうちの1人はおそらく顔見知りだ、と菌華は正気に戻り、冷静に考え無くともやばい事態にどう反応して何をすればいいのかと頭を悩ませる。

すると、暫定で2人の血を吸つてと思われるロボットの残骸の一
部が盛り上がり……。

「死ぬかあーっ!!」

『1―A切島潰されてたアーッ!!』

そこから菌華の顔見知りの方、ツンツン赤髪の不良っぽい感じとは裏腹に緑谷に比肩する良い漢の切島銳児郎が咆哮と共に飛び出して来た。彼の個性、硬化なら確かに死ぬ心配は無いだろう。

五体満足な切島を見て菌華はほつ、と一安心する。しかし実況がウキウキしている理由がわからない。

「轟のヤロウ! ワザと倒れるタイミングで!!俺じやなかつたら死んでたぞ!!」

「……A組のヤロウは本当嫌な奴ばかりだな……!!」

彼から突っ込んだ事もあり多少は自業自得とはいえ、ここで罵倒の一つも出ないあたりが彼の人間性を明らかにしている。

と、そんな聖人切島の隣から声が聞こえると、ベゴバコッ……とその装甲が彼の時と同じ様に盛り上がつてくる。

「俺じやなかつたら死んでたぞ!!」

「B組の奴!!」

『B組鉄哲も潰されてたー!!ウケる!!』

今度飛び出して來たのは、両親が5歳し酒入れた状態で考えたんじや無いかと思うほどキラキラならぬテツテツネームなB組の生徒、鉄哲徹鐵だった。

名前の通り個性は全身が鋼鉄と同様の性質を持つ、と言つたものだ。これならば切島の様に潰されても大丈夫である。

しかし切島は個性が地味な事を気にしている上に隣のクラスの生徒と個性が被つていてるという事実に涙目になりながら走り出す。

それとやはり実況が不謹慎な気がする菌華であつた。

「とりあえず俺らは一時協力して道拓くぞ!!」

「……つ!! ふんぬつ!!」

硬化男子2人に呆氣を取られ、再びぼうつとしていた菌華だったが他クラスの生徒の言葉に自分も両頬を掛け声とともに勢い良く叩いて気合いを入れ直し、目つきを改めて目の前の中型ロボットを睨め付ける。

「……ッし、気合い十分っ!! オラ、鉄屑にしてやるから来なよつ……!!」

バチバチの闘志が宿った瞳を向けつつ、菌華は右手からウイルスを放出し、その纏まりのない黒いモヤを操ってスカルミリオーネ……略称カルミの刺々しい黒槍を形成する。

そして柄をしつかり握り締め、持ち上げて槍を肩にかけながら菌華はロボットを挑発した。

『コノツ……クソ人類ツ……!! ブツ殺——』

「せねエよ!!」

感情を持つてるのではないかと思うほど良く喋るこのロボット達には挑発も効いたのか、怒っている様な機械音声を発しながら菌華を殴り飛ばさんと鉄の腕を振り上げるがその前に槍が振り下ろされ、硬そうな見た目をしている癖に抵抗も無くばっさりと袈裟斬りにされた。

『ギ……ガ……!!』

「なんだよ脆いな。これならそんなに警戒しなくても良さそう……ねッ!!」

勢いよく振りかぶり過ぎて少し地面に埋まった槍を抜くと、次は前方にいるロボットに向けて再度勢い付けて振り下ろした。

『テメエの方こそスクラップにしてヤン——グゴツ!! ギツ……!!』

今度は人で言う頭部らしき部位をそれが身体にめり込むほど強烈にブツ叩く。すると、ベゴンツ!! という勢い通りの鈍い衝撃音や鉄の軋む音、火花が散る音など見なくても良くない事が起こっているのを容易に想像出来る不協和音ばかりが奏でられる。

「あ……良く聞こえなかつたなあ。もう一度言えやスクラップ——」

「菌華ちゃんそれヒーローとしても女子としてもアウトお!!!」

不協和音と共にバグった音声を吐きながら地面に倒れたロボをガツ、と踏み付け、不良以外がしない様な勝利宣言を堂々と行う菌華の背後から、誰かと違つて模範的女子らしき声をかけられた。

「ん、麗日ちゃん。梅雨ちゃんと芦戸ちゃんも。どしたの」

「菌華ちゃんの方がどうしたん?!」

「ロボ相手とはいえたーティー過ぎるわ」

「元ヤンか！元ヤンなのか!!」

どうしたはこちらのセリフだと方言交じりで言うのが麗日お茶子。相手が人ではないといえ流石にヒーロー的ではなき過ぎるんじやないかと言うのが蛙吹梅雨。全力で元ヤンを疑つてくるのが芦戸三奈だ。

三人共菌華と同じ1年A組の生徒である。それぞれ言う内容は違えど道を踏み外した者を正す様な目で菌華を見つめていた。

「いやどうしたつて……男子女子関係なくテンションとアドレナリンぶち上がつたらみんなこうなる——」

「爆豪ちゃんみたいだつたわ」

「これからは八百万さんみたいに生きようと思うよ」

即墮ちだつた。

別段、ヤンキー的な態度を気に入つてたり意志があつたりするわけじやない上に、自分の大ツツキライなタイプである爆豪と似ているなんて言われたら彼女的にはたまつたものではなかつた。

「(流石梅雨ちゃん……!!)」

「(一瞬で骸牙なだめちゃつた……!!)」

菌華が折れるのが速かつたと言うのもあるが、蛙吹が両親の都合で弟妹の面倒を見ていたからそこら辺の扱いには長けていたというのもこの即墮ちの理由だろう。

ちなみに、菌華が肉体的には蛙吹と同年代で精神年齢に至つては上であるはずなのに小学生と同じ扱いを受けたという事には誰も触れてはいけない。

「さて、落ち着いたところで行きましょうか。道も拓けているわ」

「そくねつ……道中そいつら倒しつつ行こうか」

丁度前の方で八百万がチヨロいと言いながら0Pを大砲で倒していくのを見て蛙吹は前へ進む事を提案するが、タイミングを合わせたかの様に前方から様々なタイプのロボットが向かつて来ていた。それを見て4人ともしつかりと構える。

『ターゲット……4人!!』

「そりやまだいるよね……！」

「菌華ちゃん、進みつつ蹴散らす様にお願いね」

「わ～かつてるつてばもうつ……!!」

「そんな拗ねないでよ骸牙ーっ！競争してるとはいえ私ら一緒に行きたいんだつてつ！」

女子トークをしながらも、浮かす、強靭な舌で打ち付ける、溶かす、槍で斬り潰すなど、1人を除いて自分の得意とする攻撃を繰り出し、向かつて来た口ボを行動不能にしつつ先へと進む4人。

菌華も言われた通りに振り返る火の粉を払うだけで自ら火に飛び込む様な真似はしていない。蛙吹の説得がしつかり効いているようだ。

「それなら、うん……そ～ね……」

しかし不意打ち氣味に一緒に行きたい、だなんて言われると菌華も少し照れたのか、走りながら真横に目を逸らす。自分としてもせつかくなら知らないクラスの生徒よりも友達と一緒にの方が楽しいし、先ほど3人の方から来てくれて素直に嬉しいとすら思う。

が、いざそれを言葉にして本人達に伝えようとすると気恥ずかしさから、スムーズに3人に伝える事が出来なかつた。

「……照れたな～つ

「はっ?! 照れてないよ!? 何言つてんの芦戸ちゃんつたら!! 本当に!! 本当だから!!」

そんな芦戸の軽いノリで放つた4文字にすら過剰に反応し、否定する菌華。必死に否定する様のせいで逆に怪しく……というかほぼもう自白してるようなものだつた。

「菌華ちゃん、嘘付くの苦手なんやね……」

「良いことだと思うわ。ケロ」

からかう芦戸、自ら死に向かう菌華、それをめちゃくちや温かい目で見守る麗日と蛙吹。よくもまあ走りながらあんな茶番が出来るなとある種尊敬する後続の生徒達。なんとも混沌とした状況が出来上がつていた。

「別につ!?さつき話しかけてくれて嬉しかったな」とか!!競争中であれだけおしゃべり楽しいな」とか思つてないから本当もうマジマジのマジ!!」

「ゾンビが墓穴掘つとる!!」

ロボ地帯を抜け、神社にありそながなり長めの階段を登りながらも茶番は未だ続いていた。

最早聞いてすらい情報を探して喋る菌華に麗日が思わず吹き出してしまった。それを見た菌華は顔を赤くしながら更に拗ねてしまい、3人から顔を完全に背けてしまった。

「あつ、そつぽ向いちゃつた……」

「悪かつたよ骸牙くつ！ちよつとこう……からかいたくなつたというか……それにバカ正直なところからかつてるんじやなくて褒めてんだよつ？」

「…………!!」

麗日と蛙吹はともかく、反省の意図が感じられない芦戸の言葉には耳を貸さずにはひたすら背を向け続ける菌華。

「ほ、ほら確かに本当に隠したい事がある時はすぐバレたりするだろうけどさつ……!!」

「三奈ちゃん。それは追い討ちよ」

「…………あつ、頂上つ！」

フオローに見せかけて更に滅多打ちにする芦戸を流石にやめてあげてと蛙吹が制していると、麗日がいつのまにかすぐそこにあつた頂上を指差した。

「はつ……はあつ……いやあきつかつたあ……!!」

「これ自体が障害物みたい……!!」

「あ、骸牙。もう話してくれんのつ?」

「流石にからかわれただけでいつまでも拗ねてるほど子供じやないからね！大人ですから！」

上まで登ると息を切らしながら菌華がやつと口を開いた。芦戸的にはもう少し口をきいてくれないものだと思つていたので意外そうに質問するが、自分を大人と称する菌華は流石にあの様な理由で拗ね

続けるほど子供じやないと返した。大人ならそもそも拗ねすらしないのだが。

そんなやりとりの途中でまたマイクからの実況が入ってきた。

『オイオイ第一関門チヨロいつてよ!! んじや第二はどうさ!? 落ちればアウト!! それが嫌なら這いすりな!! ザ・フォール!!』

そう、今菌華達が立っている地面の先には広さも深さも想像付かない大穴が空いているのだ。と言つてもただ向こう岸とこちらで断絶されているわけではなく、大小無数の柱の様な足場が大穴から無数に生えており、それらが頑丈そうなロープで繋がれている。要はこのロープを掴んで進むなり立つて渡るなり飛び越えて行くなりしろと言うことだ。

しかし、底が見えないほどデカい大穴をクツショーンがあるかどうかも定かでは無いのに渡らせようとするのは、つくづく雄英の狂気の片鱗を見ているような気がしてならない。落ちれば（命が）アウトという事だろうか？と菌華は首を傾げた。

「大げさな綱渡りね」

4人の中で最初に飛び出したのは蛙吹だった。個性も綱渡りには適しているものだし、彼女の胆力を考えればこの中で一番に行くのも頷ける。

「じゃあ私も行くかなっと…………いやこつわ…………！」

続いて菌華もロープの前でしゃがみ込んで掴んでぶら下がるが、まだ進んでもないのに一気に血の気が引いていくのがわかつた。下が見えない体勢な分恐怖心はそこまで煽られないものの、それでも怖いし本能的に命の危機を感じる。

「くそ…………こんなもん用意しやがって…………!! 考えたやつ絶対馬鹿だろ……!!!」

それでも進むしかない。近道どころか遠回りだつてない。この道しかないのだ。

腹をくくつて設計者の意図通りにロープを這いすつて菌華は進んでいた。

「はあつ……はあくつ……!! ゾ、ざまあみろ……!! 渡りきつてやつた
わ……!!」

結局あの後落ちたりトラブルがあつたり、なんて事はなく安全堅実にロープを渡り続け、なんとか向こう岸に辿り着いた。

「実況によると確かこの先に……!!」

三人娘達とも離れ、今現在自分の順位がどのくらいなのかも分からないままで走る菌華。

しかし、先頭が最終関門に突入した事でその内容を大まかにだが聞いている。その内容とは……。

「おつ、見えて来た——」

「うおおおおおッ!?」

「ぎやああああああッ!!」

「いやああああああッ!!」

地雷原だった。威力はもちろん抑えてあり、ピンク色の爆風も相まってちよつとしたジョークグッズの様な印象を受けるが、こと「競争」においては侮れない障害物に変わる。

ここまでで蓄積された疲労、上位何名が通過するか不明なことから来る焦燥感、それらが注視すれば分かるような地雷をも踏ませる要因となる。

加えて踏めばそこから体勢を崩し、別の地雷を踏んでもみくちゃにされるというケースも十分にありえるのだ。したがつて皆速度よりも慎重に進む事に重きを置く関門と言えるだろう。

ちなみに今までの障害物の中で地雷原という一番危険なフレーズを持つているにも関わらず、今までで一番安全と言うのはやはりおかしいと思う菌華だった。

「阿鼻叫喚だなおい……!! いやしかし、冷静と慎重の申し子と呼ばれ

たこの私にかかれれば地雷原など恐るるに足らん……!!

言うまでもないと思うが呼ばれたというか自分で呼んでいるだけである。だが実際に菌華はゾーンに入っていると言つても過言ではないほど集中していた。それこそこんな地雷原程度なら物ともしないほどに。

何か妨害などをされなければこのまま20位以内は固いだろう。そう、妨害などされなければ……。

「さあやつてや——」

先ほどとはまた違う、落ち着いた気合いを十分入れなおし、いざ行かんと右足を前に出した瞬間……見てしまった。

隣で大きめの鉄板……見た目からしてロボ・インフェルノにいた巨大なロボの装甲を持ちながら地面に向かつて飛び込もうとする緑谷出久を。

何を……と菌華は考えた。あの目は何か策略がある目だ。ちら、と落下地点に視線を落とす。

「(野郎……)」

そこにはある物が大量に置かれていた。それを見て菌華は心の中であれだけ信頼していた緑谷を野郎呼ばわりしてしまう。

この流れからしておわかり頂けただろうが、そのある物とは地雷だ。緑谷の意図は分かる。それらを鉄板で一気に作動させて推進力にして飛ぶつもりだろう。向きや角度も彼の学力なら容易だ。しかし待て。ちょっとと言わずかなり待て。緑谷が飛ぶのはいい、大いに構わない。しかしだ。

隣にいる私はどうなるんだ?

「ニツツの捻れ緑髪ねじ——」

その思考が完了すると同時に一瞬を限界まで引き延ばされたシンキングタイムが終了する。

その同時に腕を交差させて防御を固めながらせめてもの罵倒を繰り出すが……。

次の瞬間、言葉を発するために開けていた口が一瞬で乾くほどの爆風と耳を塞ぎたくなる轟音が菌華や周辺の人間を襲つた。

「かつ……はつ……!!」

音などに対する覚悟は決めていた。しかし、所詮山積みにしてもジョークグッズと彼女は心のどこかで舐めていたのだ。そこを圧倒的な衝撃に付け込まれた。

音や爆風などの衝撃は直接的なダメージではなくとも強烈であれば人の意識を刈り取る。菌華はまさにその状況に追い込まれようとしていた。

他の生徒は偶然緑谷から離れていたおかげでそこまでのショックは無かつたが、菌華もまた偶然緑谷の真隣にいたのだ。

頭がくらくらし、耳の奥でキーン……と音が鳴り続いている。このままでは本当にまずい。

「くそつ……やるな緑谷くん……!!妨害あり……だもんな。今回は君の勝ちだわ……抜かれんなよ……!!」

そんな状態で考えていたのは、他でもない緑谷の事だつた。彼には菌華を巻き込もうと言う意思が無かつたのはわかっている。自分が前に進む事だけ考えていた。

純粹な勝ちへの思い。それを持つた者になら抜かされ、例え予選を通過出来なくとも良い……。

「(なんて言うわけねエだろツツ!!!!)」

わけがない!!!

理由がなんであれ。菌華の中で偶然故意わざどうつかりなぞどうでも良い。自分をこうした結果は変わらない。

絶対この借りを返さると言う確固たる意志により、持ち直した菌華は冷静も慎重もかなぐり捨てて地雷を踏むの前提で走り出す。

「くそ……!!頭くらくらしてる間に大分抜かれたなあ……!!ほんツとやつてんなマジ……!!」

先ほど近くにいた生徒たちも気付けば遠くを走っている。それが

更に彼女の怒りを煮えたぎらせ、地面も地雷も碎く勢いで走る。いくら踏んでもよろけなければ関係無い。そんな気概でひたすら走る。緑谷が一位でゴールしたと実況から聞けば、それも怒りに変え、怒りを力に変えて走りまくつた。

「（今近くにいるのは……青山くん！前には人の話聞かなそうなおっぱいでかい機械まみれの人、漫画の吹き出しみたいな顔してる人……人かあれ!?とにかくこれ以上ツ……抜かれてたまるかああああああツ!!!!）

体力は正直ここで使い切つてもいい。それを第一に考えて走つていた。

この種目ではそこまで個性を使用していない。ロボットの時にカルミの槍。後は綱渡りの時に身体能力をタイラントと同じにして攻略したのみで、かなり節約出来ている。ここから先では体力じゃなく個性で勝負。その考えのおかげで気持ちも身体も軽くなり、安心して鬼気迫る勢いで進む事が出来ている。

「あとツ……少しイ!!!」

「行かせ……ないよつ☆」

「はあツ!? 青山くんツ!!」

地雷原を抜け、もう一踏ん張りでスタジアム……そんな時に後ろからへそから出るネビルレーザーの勢いで空を飛ぶ青山に並ばれ、そして抜かされた。

「うおおおおおおツ!!くツそ負けるかあああああツ……!!!!」

「グツバイ☆……うツ……!!!!」

レーザーと単純な足。そろそろ限界が近づいて来た菌華の足と違つて、基本は勢いが一定のレーザー。どちらに軍配があがるかなんて言うまでもない。

ただしそれはずつと一定だつたら、の話。あと数メートルで青山がゲートをくぐる。そんな時、ネビルレーザーの射出限界がやつて來た。

腹を抑えながら地面に落下する青山を置いて……抜いた。

「いいいいいよしつ!!これで私のツ……勝ちいいいいいいツ

!!!

それを見た菌華はガツツポーズは心の中で済ませたが、その喜びを声にしつかりと出す。そして、勢い良くゲートに向かつて飛び込んだ。

「いよっしゃあああああぼぼごごぼべぼつ!!」

テンションは雲をつくほど上がり、アドレナリンはノンストップで出続けているせいか、正常な判断がつかない菌華はプールに飛び込むようにゴールをした。しかし当然下は水ではなく地面。

勢いもめちゃくちゃに付いていた事もあって、顔面から地面と接触後、全力で転がり回つていった。

「さて……ようやく終了ね。それじゃあ結果をご覧なさい！」

女子どころか男子でもしないようなどんでもないゴールを決めたゾンビを無視し、ミッドナイトが進行をする。

張り出された順位には

- | | | |
|-------|-------|-------|
| 1位 | A組 | 緑谷出久 |
| 2位 | A組 | 轟 焦凍 |
| 3位 | A組 | 爆豪勝己 |
| | | |
| 42位 | A組 | 骸牙菌華 |

最後の最後で怒りと根性によつて最下位に滑り込んだのだ。